かつ！～初期装備で魔王（ラスボス）を倒してしまったレベル１の就活中残念系勇者ですが何

左リュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゅうかつ！～初期装備で魔王（ラスボス）を倒してしまったレベル１の就活中残念系勇者ですが何か？～

【Ｎコード】

Ｎ１２２１Ｘ

【作者名】

左リュウ

【あらすじ】

ゲームの世界に転生した勇者は、魔王を倒し、元の世界に戻る事も無くただただ日々、レベル、能力値ＭＡＸの状態で雑魚モンスターやら魔王やら村長やらをオーバーキルする事を繰り返していた。そしてそんなある日神様から「ちょｗお前やりすぎｗｗｗ」的な事を言われて、また別のゲームの世界に転生。レベル、体力、攻撃力、防御力、すばやさ、オール一の残念な状態で。しかし、彼にはまだ組み合わせればチートになりうる『スキル』が残っていた。そして

転生した世界でいきなり初期装備の状態で魔王（※ラスボス）を撃破してしまう。魔王を倒してしまい、異世界で目的を失くしてしまった残念な勇者。そして勇者はこの世界で平穏に過ごす為に、村の少年と共に神殿（※ハローワーク）に向けて旅を行う事となる。勇者の安定した職を求めた冒険が始まった！　異世界転生、ＲＰＧ就活ファンタジーラブコメ！！　※主人公最強、チート、ハーレム要素有りなので、苦手な人はご注意を。現在、イラスト、レビュー等募集中！

お知らせ【レビュー・イラスト、募集中】

現在、レビュー、イラストを描いてくださる方を募集中です。

しゅうかつ！　のレビューをしてやってもいいぜ！　と言う方。

しゅうかつ！　のイラストを書いてあげてもいいんだからね！？

と言う方。

が、もしもいらっしゃるならば、連絡をお願いします。

あと、しゅうかつ！　には全く関係がありませんが短編を書いてみました。

『超能力を喰らうモノ』という短編です。

暇な時に見てやってください。

それでは、残念な勇者達の残念な会話と物語をお楽しみください。

左リュウ

第一話　魔王倒しちゃった

目の前が暗い。これは恐らく、目を閉じているからだろう。俺はそっ、と目を開ける。

目を開けると、目の前に広がるのはただっぴろい大草原。そよそよと心地よい風が頬をなでる。俺は周囲を見渡した。すると、今俺の居る位置から少しした所に村があった。

そして俺は自分の身なりを確認した。安っぽい布で出来た動きやすい服。そして腰には剣。左手には皮で出来た盾。

「・・・・・・何もこんな所に飛ばさなくったっていいんじゃないのか？」

と、一人グチをこぼす。

まあぶっちゃけると、俺は転生した。しかも、二度目だ。

元々は俺ただの普通の、平凡でイケメン（ごめん。見栄を張りすぎた）な、ゲーム好きの高校生だった。そしてある日、いつものようにゲームに一日の大半をニートのように使い込んでいたある日。

突如ゲームの世界に転生させられた。当初は俺もいきなりの展開についていけなかったのだが、なにやら俺にはチート能力が備わっていたようで、あっという間に魔王（ラスボス）を倒し、ゲームエンド、となった。

しかし、それでも元の世界に戻れる、というわけでも無かった。俺をゲームの世界に転生させた神様いわく、「どうせ戻ってもニート予備軍のような生活だし、別に戻らなくてもよくね？　面倒だし」らしい。

最後の方は明らかに本音だろう。しかし、言われてみればそうだった。別に現実に戻ってまた暇な生活を送らずとも、このゲームの

世界で最強の勇者として生きていく方がよっぽどいい。
そして、ゲームクリア後のレベル、体力、攻撃力、防御力、すばやさ、等の全ての能力値ＭＡＸの状態で、世界中で暴れまわって雑魚モンスター相手にオーバーキルしたり、よみがえった魔王に向かってオーバーキルしたり、暇つぶしに村長に向かってオーバーキルしたりしていると、またまたある日神様が俺の前に現れた。そして、こう言った。

「ちょｗお前やりすぎｗｗｗ」

うん。俺も世界中の全種類のモンスターを千回ぐらい倒した後に気がついた。
まあ、町の人はみんな大喜びだからよしとしたが。そして、神様が「お前調子乗りすぎ。今度は別のゲームの世界で勇者として頑張れや。あっ。そうそう。レベルと能力値は全部一な。ざまあｗｗｗ」
そんな理由があり、俺はこうして別世界にまた転生する事となった。

今確認してみたが、確かに俺のレベル、体力、攻撃力、防御力、すばやさの能力値が全て一となっている。しかし、神様が配慮してくれたのか、『スキル』の方はどうやら全て引き継ぎしたようだ。

「さて、そろそろ村に行くか」

俺は、村に向かって歩き出した。

☆

村に着くと、何やら村の様子が騒がしかった。俺は村の裏門から入ったので、騒ぎの中心。村の表門の方へと向かう。

因みにこの転生させられた世界は俺が前回まで居たゲームの世界とは違うようだ。（一応は、ゲームの世界のようだが）少なくとも、この村には見覚えが無い。村と言えば、うっかりオーバーキルしてしまった村長を思い出す。今度、もしも村長の生まれ変わりとかにあったらちゃんと謝罪しよう。

ざわざわと、門の所に人が集まっていた。俺は近くの人に声をかける。

「あの、この騒ぎは？」

「ああ。今日は勇者を目指す者達が旅立つ日なんだけどね、」

勇者を目指す者達って、そんな職業的な。

「村を出発した所でいきなり魔王（ラスボス）に襲われたらしいんだ」

「うわあ．．．．．．」

ぶっちゃけ引いた。

レベル一の勇者に向かってラスボスが登場とは。

大人げ無さ過ぎる。

俺は興味本位で門の近くへと寄ってみた。そこには、力果てて倒

れている新米勇者と、魔王と思わせる怪物がドヤ顔で空中に浮いていた。
魔王となんとなく判断したのは、角が生えているのと、全身が真っ黒になっていて、おでこに「魔王」と書いていたからだ。これこそ、『THE・MAOU』というような姿だ。

「卑怯だぞ！　初期レベルから一レベルも上げていないのにいきなり襲うなんて！」

村人Aが叫ぶ。

「フッフッフッ。もうのんきにレベルをゆっくりと上げる事の出来る時代は終わったのだ。これからはレベルが上がる前に秒殺して、高レベル状態でのラスボス戦を食い止めるのだ！」

「それに初期レベルのパーティに対して『全体攻撃』とか大人げないぞ！」

と村人Bが叫ぶ。

「ふっ！　笑止！　こっちだってなあ、色々と大変なんだよ！　友達や親戚の魔王からも苦情が来てるんだぞ！　勇者達（あいつら）は自分達だけ好き勝手にレベル上げて俺達に万全の状態で挑んでくるし、一人倒しても他の奴が復活させるし、なんとか全滅させても教会だなんだでまたゾンビみたいに生き返ってくるし、倒されたら倒されたらでるしよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「レベルAGE（あげ）」とかなんだ理由をつけて何回もボコボコにしてく
もうウンザリなんだよ！　こっちにはレベルなんて無いんだぞ！
(泣)」

どうやら魔王にも魔王の苦労があったようだ。それをあの涙目が証明している。

「くっ。誰か、あの魔王を倒せる者はおらんのか・・・・・・・」

苦々しく口を開くのは、村長だ。・・・・・・って、あの顔は・・・・・・！

俺は村長の顔を目を見開いた状態で見る。

それこそまさに、俺が前の世界でうっかりオーバーキルしてしまったよぼよぼの爺さん、村長だった。間違い無い。顔に「村長」と書いてある。

俺は、ずいっ、と一歩、魔王の前へと進み出た。

――――今こそ、前の世界での罪を償う時だ。

「ん？　なんだ貴様は」

「勇者だ」

「またか！　ええい、死ねっ！　レベルを上げる暇など与えるものかああああああああああああああああああああ！」

ズオッ！！　と魔王の手から切実な願いと共に衝撃波が発せられる。

「ああっ！　危ない！　あと魔王も大人げない！」

と、村人Cが叫ぶ。

しかし、俺はその衝撃波を食らっても、ノーダメージだ。

「何！？」

驚く魔王。ま、当然だな。

「貴様、一体どういう事だ！？　能力値は・・・・・・」

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一

「・・・・・・残念な能力値だ」

「うるせえっ！　ほっとけ！　自前なんだよこれは！」

「ってちょっと待て！　なぜ俺の攻撃を防げるっ！？　まさか、スキル！？　なぜそんなスキルを持っている！？　初期設定のクセに！」

スキル、というのはようするに特殊能力のような物だ。

例えば、今俺が発動した『精霊の守り』は一％～五％の確率でダメージを０にする。そして、『戦いの女神』は戦闘中にのみ幸運が訪れる。確率を持つスキルも、百％成功する、だ。

そして、さっき魔王の攻撃を防げたのも、『戦いの女神』で百％

発動する『精霊の守り』の効力でダメージを０にしたからだ。

「しかし！　こちらにはまだ魔王おなじみスキル、『二回行動』が――――」

こっちの反撃だ。ここでスキル、『先制』が発動する。

『先制』は、文字通り、すばやさに関係なく先制攻撃を行えるスキルだ。

「フッ！　しかし、攻撃力一など、蚊ほども効かんわっ！」

「はいはい。ワロスワロスｗｗｗ」

直後、ボッ！！　と、俺の手の平から発せられた衝撃波により、跡形も無く、魔王が粉砕された。もう塵一つ残っていない。

今発動したスキル『一撃必殺』は、１％～３％の確率で敵を一撃で倒す事の出来るスキルだ。これならば、攻撃力がいくら低くても関係無い。さらに『戦いの女神』でこのスキルは百％成功する。

・・・・・・・いやしかし、こんなにも手ごたえが無いとは思わなかった。

しーん、と静まり返る村人達。

「ま、」

俺は冷や汗ダラダラでにこやかに呟く。

「魔王倒しちゃった」

考えてみれば俺は、勇者達の目的（ゴール）を初期装備で倒してしまったのだ。

第二話　村長にあげちゃいます

魔王(ラスボス)を倒した後、俺は村のみんなの歓迎を受けた。そして、村長の家で宴会が行われた。そして、次の日。村長の家の食卓には、俺と、村長と、その孫のボレアスがついた。

ボレアスはぱっと見はとても大人しい少年だった。年は俺と同じぐらいだろうか。眼鏡をかけており、読書が好きなようだ。

「先日は『大人げない魔王』を倒してくださってありがとうございました」

「いえいえ。それほどの事でも」

まあ、前の世界で村長にそっくりの人をオーバーキルしていた時の償いとは言えない。つーかあの魔王って『大人げない魔王』という名前になったのか。少しアイツに同情する。（木っ端微塵にしといてあれだが）

「これからはどうするのですか？」

「そうですね・・・・・・」

ぶっちゃけいきなり魔王(ラスボス)を倒してしまった今、この世界に明確な目的は無い。やる事といえば、この世界で平穏に過ごすだけだ。

「・・・・・・俺でも働けそうな職でも探そうと思います」

「ほう。この村には神殿(ハローワーク)が無いですからなあ。他の町に行かなければ難しいですかな」

神殿って、ハローワークなのかよ。この世界では。

「だったら、その町まで行ってきます」

「出発は何時になさるのですか？」

「準備が出来次第、という所でしょうか」

動くなら早い方がいいだろう。

「そうですか・・・・・・その旅に、誰かお供をつけてもよろしいですかな？」

「と、いいますと？」

「実はこのボレアスも、就活をしていましてな。一緒に神殿（ハローワーク）に連れて行ってくれませんかな？　先日の魔王（ラスボス）に襲撃されて、行きそこなったのです」

「俺は別にかまいませんが」

「よろしく」

ボレアスは丁寧にお辞儀をした。まあ、旅は多少は騒がしい方がいいだろう。

そして、次の日に出発が決定した。俺とボレアスは表門に集まり、そして村人達から激励をとばされていた。

「頑張れよ！　都会の荒波に負けるなよ！」

「今の時代は就職氷河期だけど、頑張って就活しろよ！」

「希望した会社は何十社も落ちると思え！　それだけは覚悟しとけよ！」

うわ。なんだかリアルな激励だ。

「ボレアスも頑張れよ！」

「あ、ああ。頑張ってくるよ」

今更だが、就活する勇者というのもどうかという気がする。いや、魔王（ラスボス）を倒してしまったから仕方が無いけど。

「おっ。そういえば勇者さん。魔王を倒して、能力の方はどれぐらい向上したんだい？」

村人Ｄの質問で、ようやく思い出した。そういえば、まだ経験値を貰ってなかった。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

元々魔法はあまり使わなかったので今更だが、どうやらＭＰですら一のようだ。つーかＭＰが一だけあっても意味なくね？

「相変わらず残念な能力値だなあ」

どっ。と笑いが巻き起こる。

フッ。今の内に笑うならば笑うがいい！　俺は魔王（ラスボス）を倒して経験値をどれだけ得たと思っている！？

取得経験値：千百二十七万

クックックッ！　これで残念な能力値ともおさらばだ！

俺は経験値の取得を行った。

・・・・・・・しかし。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

取得経験値：千百二十七万

「・・・・・・へっ？」

俺の能力値が全く変動せず、ポカーンとする村人一同＋俺＆ボレアス。経験値の習得が行われていない。

・・・・・・どうやら、俺はレベルと能力値が全て一どころか、経験値の習得すら行えないようだ。つまり、俺は永遠に能力値オール一、というわけだ。

「ど、どんまい」

村人Eが慰めてくれる。

同情よりも経験値をくれよ。マジで。

しかし、この有り余った経験値をどうしよう。・・・・・・そうだ。

「じゃあこの経験値を・・・・・・村長にあげちゃいます」

「「「「村長に？」」」」

そして、俺は取得した経験値を村長に惜しみなく譲渡した。

「ほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおああ！！」

ピコーン、ピコーン、ピコーン、と村長のレベルが急速に上がっていく。同時に、村長の筋肉がモリモリと膨れ上がり、上半身の衣服がビリビリと破れてゆく。

「「「「「そ、村長――――！！」」」」」

そして、村長のレベルアップが終了した。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

村長　レベル：六十七
体力：三百四十六
攻撃力：二百六十五
防御力：百八十七
すばやさ：百七十四
ＭＰ：百七十三

「「「「「そ、村長――――！？」」」」」

もはや村長かどうかを確認する為か、声が疑問系と化している。

「お、おじい、ちゃん・・・・・・？」

ボレアスがまじまじと自分のおじいさんの姿を見つめている。あのヨボヨボとした村長が、ムキムキのマッチョマンと化している。

「・・・・・・うむ。なんだか生まれ変わった気分じゃわい」

「最早レベルが生まれ変わっているよっ！！」

そして、経験値の譲渡を終えた俺とボレアスは、神殿（ハローワーク）のある町に向かって歩き始めた。

こうして、俺達の職を求めた冒険が始まったのだった！！

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

ボレアス　レベル：一
体力：十
攻撃力：三
防御力：四
すばやさ：四
ＭＰ：四

明らかに俺のステータスの方が残念すぎる・・・・・・同じレベル一なのに。

因みに、村の中のどの人間よりも強くなった村長が『村の最終兵器』として、盗賊団を殲滅させたのは、また別の話である。

第三話　『こんぼう』をください

神殿（ハローワーク）のある町の名前は、『フロイス』という町らしい。歩けば三日で着くそうだ。

「三日もかかるのか」

まだ転生する前。ＭＰがＭＡＸ状態で魔法でガンガン色んな所を飛びまわってた頃が懐かしい。今はせいぜいスキルしか使えないし。

「そうなんだよね。それにそれまでにモンスターが襲ってこないとは限らないし。そうだ。装備を確認しない？」

最初の方は敬語だったボレアスも、なじんできたのかそれも無くなった。まあ、こっちとしても敬語のままだと距離が離れているようで嫌だし、仲良くなれたようで嬉しい。

「そうだな。確認しとくか」

俺の場合はスキルがあるから序盤のモンスターごときどうという事も無い。心配なのはむしろボレアスの方だ。

装備

勇者　たびびとの服
　　たびびとのズボン
　　たびびとの靴

普通の剣
皮の盾

と、ここまでが俺の装備だ。
さて、ボレアスの装備は・・・・・・

装備

ボレアス　たびびとの服
皮のズボン
皮の靴
普通の本←ここ、重要

「ちょっと待て！！」

「何か問題でも？」

「大有りだろ！！」

上の三つはいい。普通だ。
けどなんだ！　『普通の本』って！　最早ただの本じゃねーか！！
つーか『本』って武器なのか！？
武器だとしてもそれでいいのか！？

「武器が明らかに可笑しいだろ！」

「本って案外痛いんだよ。角で叩くと」

「解ってるけど！　痛いのは解ってるけど！」

・・・・・・ちょっと目眩がしてきた。

しかもボレアスは盾すら持ってない。

コイツは自分の命を守る気があるのか無いのか。

「全く。装備は基本だぜ！？　しっかりとした装備をちゃんと用意しておけよ！」

と、俺がめずらしく説教を始める。（ゲーム世界に転生する前は説教される側だった）が、その時。

ペリペリ・・・・・・

「「？」」

俺の『皮の盾』から不吉な音が聞こえる。直後、ぺろん、とあっけない音と共に、『皮の盾』の皮がはがれ、下からただの木の板が現れた。

「「・・・・・・」」

何かを確かめるように、俺は『普通の剣』を手に取る。よく触って確かめてみると、刀身がプラスチックで出来ていて、上に引っ張るとスポッ、と取れた。そしてプラスチックのカバーの下から木刀が顔を覗かせていた。

「「・・・・・・」」

装備

勇者　残念な服
　　残念なズボン
　　残念な靴
　　残念な剣
　　残念な盾

気がつくと装備が全て『残念な～』に変わっている。

「・・・・・・なんか、ごめん」

「・・・・・・いや、こっちこそ」

残念な装備を装備しながら、俺達は歩を進めた。

☆

それでも、なんとか旅は一日続いた。途中でモンスターに会わなかったというわけでも無いが、俺のスキルで一掃して行ったので問題無し。

しかしその経験値を俺は得られない為、ボレアスに譲渡する事となる。そしてボレアスのレベルはメキメキと上昇していった。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

ボレアス　レベル：七
体力：二十五
攻撃力：十三
防御力：十
すばやさ：十
ＭＰ：十

最早俺の七倍のレベルへと到達している。
正直凹んでいないといえば嘘になる。いや、だって俺がワロスビーム（↑俺命名）で敵を一掃しているのに、その経験値は全てボレアスに行くのだから。

・・・・・・あの神（クソじじい）。次にあったら覚えてろよっ！

そして、旅は二日目へと突入した。
俺もボレアスも早く目が覚めてしまった為、出発は早めとなった。

そして歩き続け、昼前に道端にある一つの店のような小屋が見えた。

「行ってみようか」

「そうだな」

その小屋の前に行ってみると、そこはどうやら出張の武器屋だった。店の主人に話しを聞いてみた所、ちょうどこの先からモンスターの強さが上がるらしく、装備を整えたい旅人達にとっては重宝されているらしい。

「俺達もここで装備を整えよう」

「得策だね。特に君は装備が残念だし」

「やめてくれ。俺の心の傷を広げないでくれ」

ついさっき店の主人からも「残念な装備だな．．．．．．」と言われた所だ。

「店にあるのは『銅の剣』と『こんぼう』と．．．．．．」

案外普通の装備だな。

「『銅の本』」

「ちょっと待て！！」

おかしい。

あきらかにおかしい。

もしかして本は以外と武器として流行っているのか！？

「『銅の本』を下さい」

「買うのかよ！？」

「一万Gとなります」

「しかも高いッ！！」

まあ、ここまでに虐殺しまくったモンスター達のおかげで、金はそれなりにある。

「俺が買えるのは『銅の剣』と『こんぼう』か」

「どっちにする？　一応攻撃力は『銅の剣』の方が高いけど」

う～ん・・・・・・どうしようか。

一応俺にはスキル、『二刀流』があるので武器は二つ装備出来る。残念な剣を一刻も早く手放したいのだが、神のせいか否か呪いの装備のごとく装備を外せない。しかも攻撃力が一しかないのだから残念すぎる。

そして俺は迷った末に、

「『こんぼう』をください」

「タダでいいよ。なんか、残念な装備で気の毒だからね・・・・・・」

「はは・・・・・・ありがとうございます・・・・・・」

人から同情を貰うぐらい残念なのだから泣けてくる。

☆

「どうして『こんぼう』にしたの？」

店を出た後、ボレアスが当然の疑問をなげつけた。

「いや、斬るより殴る方がなぶり殺しに出来ると思って。だから俺の中では『なぶり殺し＝こんぼう＞銅の剣』なんだよ」

「・・・・・・趣味わる」

と、ボレアスがぼやいた瞬間だった。

草むらから突如、モンスターが現れた。

「身包みを全て置いていけっ！！　そうすれば命だけは助けてやるぞ！？」

偉そうにぎゃーぎゃー叫ぶこの猿は、『ヤマザル』。知能がほどほどに高く、人と会話を行う事が出来る。

「丁度いい。『こんぼう』の試運転だ！」

俺はスキル『先制』を発動。先制攻撃をしかける。

「『こんぼう』！？　フハハハ！　ばかめ！　貴様のレベルで、そんな物が効くと思ってるのか！？」

勇者　職業：無職

VS

ヤマザル　職業：モンスター

「・・・・・・無職か。なんか、すまんな。取られる物も無いのにはりきって」

「うるせえええええええええええええええええええええええ！！（泣）」

先制攻撃で俺は泣きながら『ヤマザル』に殴りかかった。

しかし、『一撃必殺』のスキルを使っていないのでダメージは一。

ここはあえて使わなかった。

「効かんな！」

スキル、『二回行動』を発動。

「それがどうした！」

『二回行動』を発動。

「えっ？　連続で『二回行動』はちょっと・・・・・・」

『二回行動』を発動。
『二回行動』を発動。
『二回行動』を発動。
『二回行動』を発動。
『二回行動』を発動。
『二回行動』を発動。
『二回行動』を（ｒｙ

「ちょｗｗｗおまっｗｗｗ　痛っ！　え？　ちょっ、マジでやめ・・・・・ぎゃあああ！！」

「こんぼうの力を思い知れ！！」

俺は地道に一のダメージを蓄積していく。
『ヤマザル』はほどほどに知能は良いが、相手に∞連続スキル発動を許してしまう『強者の余裕』という『マイナススキル』を持っている。
『マイナススキル』というのは、使用者に不利な物をもたらすスキルだ。逆に『先制』や『二回行動』のような使用者に利益をもたらすスキルは『プラススキル』と呼ばれる。
昼間の空に、こんぼうにボコボコにされたモンスターの断末魔が響いた。

そして俺達は次の日の昼、ついに『フロイス』へと到達した。

・・・・・・『こんぼう』にへばりついた猿の血、落ちるかな。

第四話　ここが神殿（ハローワーク）か

就職都市『フロイス』。

ボレアスによると、この『フロイス』には大規模　神殿（ハローワーク）があるらしい。中でも、この『フロイス』にある神殿（ハローワーク）は世界でもトップクラスの実績と規模を誇るらしい。

『就職都市』の名は伊達では無い。仕事が見つかるまでは、恐らくこの都市が拠点となるだろう。

とりあえず、俺達は早速、神殿（ハローワーク）へと直行した。

歩いていると、都市自体はかなり活発に動いているように見える。人の流れも盛んで、にぎやかだ。辺りを見回すと宿もいくつかある。ここは就職都市なので、恐らく仕事が見つかるまで居座る人が多いためだろう。そういう人達に配慮してか、宿の値段も格安だ。

神殿（ハローワーク）の前にたどり着くと、そこには巨大な文字通りの神殿があった。恐らく神殿（ハローワーク）一つだけでボレアスの居た村ぐらいの広さはあるだろう。

中の移動は大変そうだ。

俺とボレアスはさっそく中に入る。入った途端、職を求めに来た迷える哀れな子羊達でいっぱいだ。（勿論、俺達もその内の一人だが）

「ここが神殿（ハローワーク）か」

勇者がハローワークに行く事なんて正直聞いた事が無い。

「なんだか人が多いな」

「そうだね。でも、ここは世界でもトップクラスの神殿（ハローワーク）だから、色

んな所から人が来るんだと思う」

納得。

確かに、それならばこの人の多さもうなずける。

周囲を探るために耳をすませてみると、

「また落ちたのですか？」

「はい・・・・・・・やっぱ僕って、死んだ方がいいのかな・・・・・・これだけ落ちると・・・・・・・」

「あきらめないでください。一緒に頑張りましょう」

「でも・・・・・・これでもう五十七社目だし・・・・・・」

「頑張ってください。あきらめても何も解決しませんよ」

なんて声が聞こえてくる。

「・・・・・・凹(へこ)むわあ・・・・・・・」

「やめてよ。縁起が悪い」

就職試験で勇者が五十社以上も落ちるとか考えたくない。これなら魔王の方が相手的にはどれだけ楽だったか。

そこでふと、ある一つの求人広告に目が止まった。（神殿(ハローワーク)の中には求人広告が色んな所に貼られており、嫌でも目につく。）

魔王求ム！！

〜仕事内容〜

・魔王の城で偉そうなイスに座って偉そうに座る。

・立ち向かってくる勇者を返り討ちにする。（一つの勇者パーティを全滅する事にボーナス十万円）

・城の中のモンスターの訓練とモンスターの配置。

・城の中の罠の設置。

〜報酬〜

・アルバイト→自給：五百円

・正社員→月給：月収百万円

・アルバイト、正社員問わず、魔王をしている間は魔王の城をプレゼント

〜注意事項〜

・座り仕事が主ですが、できるだけ魔王のイメージを壊さないようにしましょう。

・『第一形態から第三形態までの変身が出来ない者は不可』←重要！！。

・危険な仕事です。勇者パーティは全滅させてもまたレベルを上げて再チャレンジしてきます。

・倒されても、相手はレベル上げの為に何度もやってきます。

・アルバイト、正社員問わず、一度受けると一ヶ月は辞める事は出来ません。

〜取得していると優遇される資格〜

・魔王検定一級

・座禅検定一級

・変身検定一級

・『二回行動』検定一級

・モンスター検定一級

魔王をやりたい！　という方はコチラの番号まで→〇〇〇―××××―〇〇〇（世界魔王協会コールセンター）

やる気のある方なら初心者でも大歓迎！　スタッフが温かく歓迎いたします！

「・・・・・・俺、これやろうかな」

「やめときなって・・・・・・」

魔王の正社員ってこんなに儲かるのか。いいな畜生。

「あー、確かに。俺、第三形態までの変身なんてとても出来ないからなあ～。俺も『変身検定』取ろうかなあ」

「いや、そういう意味じゃなくて」

結局、未練がましく魔王の求人広告を見ていた俺は順番待ちの席まで連れて行かれた。しばらくすると、俺とボレアスの順番が巡ってきた。

俺は十一番。ボレアスは十二番だ。

「それじゃ、また後で」

「おおー」

カウンターに座ると、目の前にはいかにもベテランと言った風貌の中年のおじさんだった。とても厳しく、厳つい顔をしている。（しかもなんか右頬に傷があるし。本当に公務員か？）

「それでは、履歴書のご提示を願います」

俺はいわれるがままにさっき書いた履歴書を出す。履歴書には自分の簡単なステータスを書くだけだった。

勇者　レベル：一

体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

装備

残念な服
残念なズボン
残念な靴
残念な剣
残念な盾

「・・・・・・ぷっｗ」

「笑いましたよね？　絶対に今笑いましたよね？」

「いえｗｗｗ笑ってませんよｗｗｗ」

うわー。ムカつくわー。しかも、もう完全に隠す気がねえし。

「それでは少々お待ちくださいｗｗｗ」

そう言って、おじさんは奥へと消えた。

「おいｗｗｗ見ろよこれｗｗｗ」

「うわっｗｗｗレベル一とかｗｗｗ」

「しかもなんだこの残念な装備ｗｗｗワロタｗｗｗ」

・・・・・・泣いてないからな？　これはあれだ。今朝飲んだ『就職ジュース（グレープ味）』が目から溢れてきたんだ。

というか人の履歴書をネタにするとかどういう事だあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！　こんなのただの公開処刑じゃねか！！

「しかも名前が『勇者』とかｗｗｗ」

「野菜ジュース吹くわｗｗｗ」

やめて！　俺のライフはもう０よ！（泣）

しかも名前（そこ）はトラウマなんだよ！

「おまたせしました（笑）」

「・・・・・・（泣）」

いや、「ｗ」が「（笑）」になっただけでもよしとしよう。

「え～っと、勇者（笑）様のご就職先なのですが・・・・・・」

ぶっ殺すぞクソじじい。

☆

「・・・・・・どうだった？」

神殿前(ハローワーク)でボレアスと落ち合った。ボレアスの落胆したような表情を見ると、どうやらあまり良い返事をもらえなかったらしい。
しかし、恐らく、俺の方が被害は重大だろう。
なぜなら、

「・・・・・・レベルと能力値がオール一じゃあ就職先なんてほとんどねえぞだって」
「(´・ω・`)」

そんな表情はやめてくれ。
余計に落ち込むから。
・・・・・・就職への道のりはまだまだ程遠い、という事だろうか。

第五話　やってやるよ。クソジジイ（前書き）

今回の話は雰囲気一変！？　就職への第一歩を踏み出します（笑）

第五話　やってやるよ。クソジジイ

俺達は、とりあえず今日の宿を探しに行った。
就職都市『フロイス』の宿はさっきも言った通り、格安だ。
しかも俺達にはこの『フロイス』に来るまでに潰しまくったモンスターから失敬した所持金が沢山残っているので、一応数週間は保つだろう。
しかし、早めに職を得なければいけない状況なのには変わりない。モンスターを倒して日金を稼いでもジリ貧だ。早めに安定した職につかないといけない。
そしてすぐに宿は見つかった。神殿（ハローワーク）に近い宿だった。
夕食を取り終えると、俺とボレアスは部屋へと向かった。

「はあっ。どうすればいいんだろーな・・・・・・」

この町に来るまでずっと野宿だったので、久々のベッドの感触が心地よい。しかし、当面の問題は山積みだ。
俺はいまいましいあのクソ神（じじい）のせいでレベルが上がらない仕様となっている。それではもう書類審査で落ちる。
かといってのろのろと資格習得にチャレンジし、資格を得たとしても果たして職が見つかるのだろうか？

「もうとりあえず、もう今日は寝よう・・・・・・」

「ああ。そうだな・・・・・」

うだうだと頭を悩ませ続けても仕方が無い。
とりあえず、長旅で疲れきった体を休ませる事に専念しよう・・・・

俺とボレアスはそのまま眠りについた。

☆

朝。

起きてみると、久々のベッドの効果は抜群のようで、気持ちよく目覚めた上に疲れも完全にとれていた。

部屋の窓からはまばゆいばかりの朝日が差し込んできていた。

よし、とりあえず今日からまた頑張ろう。

隣のベッドからボレアスも起きて、そしてその後俺とボレアスは支度をして、朝食をとるために一階の宿の食堂へと降りていった。

食堂はまだ時間が早いせいか、人の数自体はあまり多いとは言えなかった。

俺とボレアスは注文した朝食が来ると、それを食べ始めた。

「そういえば、どうしてボレアスは駄目だったんだ？」

「う～ん。どうやら僕のレベルではまだ就活するには少し不足みたいなんだ。最低ラインが十レベルから。勿論、レベルが高くなればなるほど良い所に就職出来るけど」

なるほど。という事はレベルが高ければ高いほど高学歴、という事が解りやすいゲーム（よのなか）だ。

「はあ。だったら俺に就職は永遠に無理だな」

最早八方塞だ。

「アンタ等、もしかして就活してるの？」

ふいに、食後のデザートにいちごパフェを食べている俺とボレアスに声がかけられた。
声の方向を振り返ってみると、そこに居たのは俺とボレアスと同じぐらいの年齢の少年（因みに俺は高校二年生。高二病真っ盛りだ）。
額にはなにやらタオルを巻いていて、いかにも職人、という感じだが、しかし、手には指輪だのなんだのがはめられている分、なんか、ちゃらい。
そういえば、中学時代はこんな感じのちゃらい奴は大体タバコを吸っていて、なんか弱そうな奴を見かけるとすぐにからんできたりと、まあ要するに不良に俺はおびえて暮らしてたのを覚えてる。
しかし俺は一応これでも頭が良く、地元ではＴＯＰ成績を誇る高校へと進学している。
どうだ。見直しただろ？

「誰？」

ボレアスが素朴な疑問を投げかける。

「おっと。コイツは紹介が遅れたな。俺の名は『コークス』。で、質問だ。アンタ達、もしかして職を探してたりする？」

「ああ」

「ふ～ん。でもその様子じゃあ上手くいってないみたいだな」

「ほっとけ！」

しかし、このコークスとか言う奴はどうして俺達に話しかけてきたんだろう？

「ま、そう警戒するな俺はお前達に職を紹介してやろうってんだから」

「「はあ！？」」

☆

コークスが唐突に俺達にとっては願っても無いような事を言い出したので、とりあえずは内容を聞いてみる事にした。
話を聞いてみると、コークスはこの町の鍛冶屋の息子らしい。
父親はこの町でも屈指の鍛冶師で、その跡取りを探しているらしいのだ。
要するに、コークスが提供する『職』というのは鍛冶屋の事だろう。
俺達はとりあえずその話にのる事にした。そして、現在はコークスと町の鍛冶屋へと向かっている道中だ。

「職を提供しておいてなんだが、あのクソジジイの機嫌をそこねるとかなりめんどくさいからな。気をつけろよ」

それはつまり、職人キャラお馴染みの気難しい性格、というヤツだろうか。隣を見てみるとボレアスも薄々勘付いたらしい。
案内された鍛冶屋はレンガ造りの小屋のような建物で、中に入ってみると武器を作るための道具や、作り終えたであろう武器でいっぱいだった。

「おいクソジジイ！　従業員を連れて来たぞ！」

コークスが小屋の奥へと向かって叫ぶ。

そして、奥から出てきたのは厳しい顔つきのお爺さんだった。手にはハンマーのような物を持っている。武器を作るために必要な道具なのだろうか。

「オラ、お望み通り従業員を連れて来てやったぜ。感謝しろよ」

「フン。人を探す事ぐらい誰にでも出来る。問題は、使えるかどうかだ」

じろり、とお爺さんは俺達をにらむ。

使い物になるかどうかと聞かれると、昨日の神殿（ハローワーク）での公開処刑っぷりを見てもらえば解るが自信が無い。

「・・・・・・鍛冶屋にレベルは関係無い。必要なのは気力だ」

いや、レベルは関係あると思う。

「しかし、無駄に馬の骨を鍛えても意味が無い。ここは一つ、採用試験を受けてもらう」

「「採用試験？」」

試験があるとなるとこれは余計に不安だ。

俺のスキルはレベルや能力値をあげてくれるわけじゃない。

レベルや能力値が関係してくる試験だと完全にアウトだ。

「『エンペラー鉱石』、という物を知っているか？」

「あっ、知ってます」

「俺も知ってる」

『エンペラー鉱石』、というのは素材アイテムの中でも高ランクの素材だ。

素材アイテムには一番上から『S』、『A』、『B』、『C』、と、最低の『F』ランクまでの七段階が存在する因みに『エンペラー鉱石』はAランク。

どうやらこの世界は俺のプレイしていたゲームの町並みと違うようだが、スキルや魔法、アイテム等は同じのようだ。

「『エンペラー鉱石』は確かAランクの素材アイテムで、様々な剣に加工する事が出来るっていうレア鉱石ですよね？」

『エンペラー鉱石』は確かに『様々な剣』に対して加工する事が出来る。しかし、その仕様用途はあくまでも『剣』のみだ。

簡単に言うと、剣にのみ加工する事が出来て、銃や盾や防具には加工出来ない、という事だ。

「知っているのならば話が早い。『エンペラー鉱石』二十個をここに持ってきたら、合格だ。ここで雇ってやる」

「なっ！？　バカジジイ！　無理に決まってるだろ！　『エンペラー鉱石』はAランクのレア素材だぞ！？　しかも『エンペラー鉱石』はAクラス以上のダンジョンでしか採掘する事は出来ねえんだ！そんな無理難題を押し付けるんじゃねえっ！」

そしてコークスは俺をびしっ！　と指差す。

「そして見ろっ！　コイツのステータスをっ！」

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一
装備
残念な服
残念なズボン
残念な靴
残念な剣
残念な盾

「こんな残念なレベルでＡランクダンジョンに行けば、残念な死に方をするだけだっ！」

「それほど言わなくても、ソイツの残念なステータスはちゃんと見えとるわい」

「残念残念うるせえなっ！　もう聞き飽きたんだよっ！」

くそっ。俺が一話から四話にかけて、どれだけ『残念』と言われ続けてきたんだと思ってるんだ。

「・・・・・・それでは・・・・・・・やるんだな」

お爺さん、いや、ジジイが俺をにらむ。

「ああ。その試験、やってやるよ。クソジジイ」

☆

就職都市『フロイス』は、都市としてそれなりの規模を誇っている。

よって、『ギルド』という、様々なクエストが集まる集会所のような所も完備されている。

俺達はとりあえず、ギルドに足を踏み入れた。中にはダンジョンに挑戦しにきた者達でいっぱいだ。

「Aランクのダンジョンならどこでもいいよな」

「・・・・・・本当に行くの？」

Aランクダンジョンの前ではゴミのようなレベルを誇るボレアスはやはり不安なのだろう。

「まあお前のその残念なレベルで不安なのは解るけど」

「今残念なレベルって言った？　それ、君だけには言われたくないんだけれど」

日頃の恨みだ。畜生。

ふはははは！　立場逆転！　ボレアスがゴミのようだ！　ありがとうAランクダンジョン！　俺に優越感を与えてくれて！

「で、どのダンジョンを受けるんだ？」

「・・・・・・なんでお前がこんな所に居んの？」

そしてなぜか、俺達と一緒について来たコークスも一緒だ。

「・・・・・・あんなクソジジイと二人きりで居れるかよ。間が保たねえからな」

なるほど。

「っと、とりあえずまずはクエストを探すか」

俺は『ダンジョン表』をパラパラとめくる。

そしてふと、あるページでその手が止まった。

Aランクダンジョン

ダンジョン名：『広大なる大地』

出現モンスター：鉱龍ゼーゲルコーン等

※注意　鉱龍が出現します。Aランクダンジョンの中でも危険度トップクラスのダンジョンです。

鉱龍ゼーゲルコーン、というモンスターは、『鉱龍』のという異名を持っているモンスターだ。体の色々な所に、色々な鉱石を纏っている。

コイツなら、『エンペラー鉱石』も大量に纏っているに違いない。

「え？　それやるの？　それってAランクの中でも結構危ないダンジョンクエストだぜ？」

「それはちょっと止めない？　ホラ、僕のレベルの事も考えて・・・・・・」

「ゴミのようなレベルの奴等の事なんか知るか」

「「お前だけには言われたくないっ！！」」

結局、俺は二人の反対を押し切り、Aクラスダンジョンにチャレンジする事にした。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

ボレアス　レベル：十
体力：三十
攻撃力：十六

防御力：十四
すばやさ：十四
ＭＰ：十五

コークス　レベル：十
体力：三十五
攻撃力：十八
防御力：十八
すばやさ：十八
ＭＰ：皆無

なぜか、コークスのステータスの一番下を見て不安になった。

第六話　コマンドとしては『にげる』をオススメする

ダンジョン。
そこには様々なアイテムや宝が潜む場所。同時に、多くのモンスターの潜む場所でもある。

そして、人が『ダンジョン』に行くケースはおおまかに分けて二通りある。
よく、商人や武器屋、鍛冶屋等の人々は、自分達の代りにダンジョンに行き、素材を入手してくれる者達に依頼をしているケース等もある。それが、『代行クエスト』。

逆に、誰からの依頼も受けずに、個人でダンジョンに挑んだり、パーティを組んでダンジョンに『何か』を求めて挑む場合。それは『ダンジョンクエスト』と呼ばれる。

そして俺達の場合は、後者である。

☆

『広大なる大地』は、以前俺がプレイしていたゲームの世界には無かったダンジョンだったのだが、まあ基本的には通常のダンジョンと変わらない。
地上から下へ下へとアイテムやモンスターを求めて進んで行く。
ただ、問題なのは通常の（俺が以前プレイしていたダンジョンに比べるとだが）ダンジョンと比べて、ワンフロアがとてつもなく広い。
恐らくこれが、『広大なる大地』というダンジョン名の由来なのだろう。

「つ、疲れた・・・・・・」

『広大なる大地』は全部で地下十階まで。これはAランクダンジョンにしてみればかなり低い。

しかし、その分ワンフロアが広いので探索には骨が折れる。

それに加えて、俺の体力数値は『一』。

他の二人よりも体力がどうしても低いので、疲れやすい。

「何言ってるんだよ。まだ地下二階じゃないか」

「ケッ。体力五十越えのリア充共が」

「それだと基本的にこの世の大半の人がリア充になっちゃうね」

「当たり前だろ。この世はリア充七、非リア充三の、七：三のバランスで成り立っているんだよ」

「君は勿論『三』の方だよね？」

「うるせえ！」

ぶっちゃけ、このAランクダンジョンは一番上から二番目のランク。よって、通常ならば終盤辺りから受けるダンジョンであるのだが、レベルが序盤丸出しの二人をつれてモンスター相手に（俺が）無双していると、経験値の振り分け上、どうしても二人のレベルがガンガン上がっていってしまう。

因みに現在のレベル。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

ボレアス　レベル：二十
体力：五十
攻撃力：三十五
防御力：三十四
すばやさ：三十三
ＭＰ：三十四

コークス　レベル：二十
体力：五十五
攻撃力：三十八
防御力：三十八
すばやさ：三十八
ＭＰ：皆無

相変わらずコークスのＭＰは皆無。
しかし、ボレアスに比べれば全体的に能力値は高い。
一応は鍛冶屋の仕事を手伝って体を鍛えたので体の基礎作りは出来ているらしい。

「いやあ。しかし、これだけ倒しても上がらないもんだねえ。レベル」

「不思議な体質してるな。お前」

「不思議な体質って・・・・・・・ まあ言うなればそうだが」

「いや、不思議な体というより・・・・・・ 残念な体質？」

「言い直しちゃったよ！ 言い直さなくてもいいのに！」

「ほら、よくあるじゃん。某猫型ロボットの手だって一見丸っこいけどなんかイザとなったら指が生えたりするでしょ？ 不思議具合だとあれと同じだよきっと」

「そんな国民的大人気アニメの愛嬌ある猫型ロボットと一緒にするな！ 格が違いすぎてあちらに迷惑かけるわ！ しかも意味が解らん！」

「そうか。ならあれだ。某特撮ヒーロー物のドラマみたいに変身中に限って敵が攻撃してこないみたいな不思議だな」

「やめろ！ 特撮ヒーロー物は子供達と大きいお友達の浪漫であり夢なんだぞ！ 無粋な事を言うな！」

というよりこうやって自分の残念な体質をまじまじと解説されるのはなんか嫌だ。

つーか特撮ヒーロー物の悪口はやめろ。あれだからな？ 最近の特撮ヒーロー物は凄いんだからな？ おもちゃなんかメチャクチャ売れてるんだからな？ そして俺もその購入者の中の一人なんだか

らなああああああああああ！！

なんだかんだで俺達は（というより主に俺が）疲れながらも地下八階までたどり着いた。

☆

『エンペラー鉱石』が採掘出来るのは地下五階からだ。

採掘道具もちゃんと持ってきている事だし、一応採掘出来る事は出来るのだが、二十個も採掘しなければいけないとなると、最下層まで足を踏み入れなければならないだろうし、時間もかかるだろう。

それならば、『鉱龍ゼーゲルコーン』を倒して、纏った鉱石をいただいた方が早い。

よって俺は頑張って『ゼーゲルコーン』を探しているのだが・・・・・・

「あっ。一個採れた」

「こっちも採れたぞ」

この二人は頑張って地道に稼いでいるようだ。

もうこれで十個目か。

「・・・・・・この調子だとなんだか『ゼーゲルコーン』にたどり着く前に集まってしまうな。『エンペラー鉱石』」

「「集めなきゃいけないんだよッ！！」」

最早必死だ。

まあ本来『ゼーゲルコーン』はレベル五十台ぐらいでやっと倒せるレベルだ。
それを初っ端、それもこんなゴミのようなレベルの内から相手するのも不安になるのは無理は無い。
「はあ。もうちょっと奥に進んでみるか・・・・・・ん？」

その時。
突然、俺達の目の前に。
巨大な鉱龍の翼が現れた。
「「「・・・・・・」」」
あれ？　確か『鉱龍』って最下層じゃなかったっけ？　あれ？
ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！
「あー。なんか。アレだな。出てきちゃったな」
「大層ご立腹なようだ」
「こりゃアレしかないな」
「「逃げる！！」」
ダッ、と二人は駆け出した。
「逃がすか！（ばきゅっ）」

そこをガシッ！　と俺はしっかりと二人の首を掴む。
途中で「ばきゅっ」って音がしたけど気にしないでおこう。

というか、そもそも『鉱龍』は最下層に居るモンスターのハズだ（『これさえ読めば完璧！　Ａクラスダンジョンのヒ・ミ・ツ☆ギルド公式ガイドブック』より）。

「げほっ。それにしてもどうしてこんな所に・・・・・」

俺もどうしてなのか解らず、ふいに『鉱龍』の足元（というよりサイズ的にどうしても主に足元を見てしまう）を見ていると。
なんとなく。
その理由が解ってしまった。

まあ、簡単に理由を説明しますと。
『鉱龍』の足元に、少女が居まして。
そして『鉱龍』はその少女を狙っていまして。

そしてそれはつまり。

最下層から逃げてきた少女が、ついでに『鉱龍』さんを連れてきてしまった、という話であって。

「・・・・・・選択肢（コマンド）としては『にげる』をオススメする」と、ボレアス。

「異議無し」と、コークス。

「鬼かお前等は！」

「ふざけんな。俺達が『鉱龍』に挑む。それはすなわちラディッツに一人でフリーザを倒して来いと言っているような物だぞ！」

「うるせえ。お前等はラディッツどころかヤムチャだろ」

「それは聞き捨てならないな。あんな他人の戦いを端から観戦して、それで『俺はもう戦わないからな！』みたいな事言ったり、あげくの果てに某人造人間を探索してたら逆に返り討ちにあうようなヤツと一緒にしないでくれないか。反吐が出る」

それではラディッツとヤムチャが可哀想だろう。

のんきに会話する俺達をよそに、少女は必死に走って攻撃をかわし、そして逃げ続けている。

「きゃっ！」

その少女はついにというかなんというか、足元を躓いて転んでしまった。『鉱龍』の足が、真上から少女に迫り来る。それはつまり、『踏みつけ』。

「ええい畜生！」

勇者　職業：無職

ＶＳ

鉱龍ゼーゲルコーン　職業：モンスター／鉱龍

『鉱龍』って、職業だったのかよ・・・・・と内心ツッコミを入れつつ、俺はスキル『先制』を発動。

『少女に先制攻撃を行った』。

まあ俺のレベルは一なので、突き飛ばしたぐらいじゃあ『攻撃』にもならないけど。

だけど、少女を『鉱龍』の足の落下地点からずらす事は出来るだろう。

結果的にそれは成功した。

少女の反応はそれはそれはビックリしていて（まあ当然だが）。

俺は『鉱龍』の足の落下地点の真下に居るワケだ。

しかし、俺にはスキル『精霊の守り』があるのでこれぐらいじゃあ、死にはしない。

☆

少女、セレネーは困惑していた。

自分を助けてくれた少年。

しかし、その少年の真上からは『鉱龍』の足が迫り来る。

それでも少年の顔に焦りは無かった。

そして。

ぷちっ。

と、軽い音を立てて、少年が踏み潰された。

☆

「・・・・・・・踏み潰されたな」

「・・・・・・・だね」

自分達の目の前で勇者が踏み潰されてしまったワケなのだが。

一向に出てくる気配が無い。

「・・・・・・・やばくね？」

「・・・・・・・いや。大丈夫だよ。だってホラ、スキルもあるし」

「あれ？　でも『鉱龍』足の下からなんか、赤い液体が出てなくね？」

「違うから。アレは血じゃないから。あれはただ動物の主要な体液で、全身の細胞に栄養分や酸素を運搬したり二酸化炭素や老廃物を運び出すための媒体だから」

「それを血って言うんだけどな・・・・・・それと、一つ思ったんだけど」

「何を？」

「あくまでもスキルは『防御力』を上げてくれるのであって（それどころか勇者のあのスキルは『ダメージを０にする』だったが）、『筋力』はあげてもらえないんじゃね？」

「・・・・・・」

☆

俺はなんとか。

なんとか助かってはいる。

なんか外で俺が死んだみたいな会話をしているっぽいけど、俺はまあ生きている。

踏み潰された事は踏み潰されたのだが、そこはまあスキルがあるのでダメージは０。

ただ『鉱龍』に踏み潰される直前に。

思わず条件反射で。

『残念な剣』を抜いてしまって、その剣の切っ先が真上に向き、『鉱龍』の足からなんか血がちょこっとだけ出ているのだが、まあそれは置いておこう。

しかし今のこの状況的には足で踏み潰された画鋲の気分だ。

ただ。

問題なのは。

なぜか『鉱龍』が足をどけてくれない、という事だ。

まあスキルがあるので確かに俺にダメージは無いのだけれども。

筋力までは強化してくれない。

まあ、確かに画鋲って踏んだら痛いよな～。多分今頃『鉱龍』も

涙目で動けなくなっているのであろう。はっはっはっ。計算通り計算通り。

よって。

俺はこのまま身動きがとれないでいた。

「・・・・・・いや・・・・・・・マジでどうしよう・・・・・・・」

画鋲の如く踏み潰された勇者っていうのもなんだか残念すぎるだろ・・・・・・・

第六話　コマンドとしては『にげる』をオススメする（後書き）

ついにヒロイン、セレネーが登場！（まだ殆ど何もしていないけど）

・・・・・・六話になってヒロインが初登場とか。

べ、別に忘れてたわけじゃないんだからね！？（汗）

第七話　『威圧』なんかあるの？　なんか心なしか涙目なんだけど

前回のあらすじ。

モンスターに踏み潰されて地面にめり込んで出られなくなっている勇者。

・・・・・・・いや。本当にそうだから困る。

というか、『鉱龍』が踏みつけた事により、そして俺には攻撃が効かないスキルが働いた事により。

俺はダメージを受けていない代わりに地面にめり込まれたままなのだが。

まあダメージが無いのはいいとして。

しかしそれでも問題はあって。

踏みつけた足が一向に動かない。

俺の持つスキルの中に筋力を強化してくれる物なんて無い。

よって、『鉱龍ゼーゲルコーン』が動いてくれないと、反撃も出来なければここからどく事も出来ないのであった。

・・・・・・・つーか。

もうそろそろ助けてくれてもいい頃なのに。

一向に助けが来ないのはどうなっているんだ。

あいつ等もしかして俺を見捨てたか？

ありうる。

そもそもあの少女・・・・・・まあ、女の子を見捨てようとしたんだからな。

まあ俺も見捨てられるのも解る。

そういえば。あの女の子はどうなったのかな。それにしても可愛かったけど。うん。可愛かった。

・・・・・・・・・・・・。

い、嫌だあああああああああああああああああああああああああ
あああああああ！！

このままモンスターの足の下にある画鋲の如く一生を終えるなん
て嫌だぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！

誰か！　助けてくださああああああああああああああああああ
ああああああああい！！

☆

その頃ボレアス達は。

「あっ。そうだ。僕レジャーシート持ってきてたんだけど。ここで
お茶でもする？」

「そうだな。モンスターもなぜか出てこなくなったし。アンタもど
うだ？」

「・・・・・・いいの？」

「オッケーオッケー。可愛いから。むしろ大歓迎」

「そういう所チャラ男って思うよ。僕」

「お褒めの言葉、有難う」

そしてボレアスは人数分の紙コップに、人数分のお茶を入れる。
コークスは自分の紙コップを持って、立ち上がる。

「え～。それでは。勇者のご冥福を願いまして。乾杯！」

「乾杯」

「かんぱい・・・・・・・？」

☆

うう・・・・・ダメだ・・・・・・。
一向に助けが来る気配が無い。
というか嫌だぞ。踏み潰されたまま一生を終える勇者って。
何か良い手は・・・・・・

『あっ。そうだ。僕レジャーシート持ってきてたんだけど。ここでお茶でもする？』

・・・・・・は？

『そうだな。モンスターもなぜか出てこなくなったし。アンタもどうだ？』

この声はコークス？　ていうか何さりげなく誘ってんの？　無駄にそんな所でチャラ男っぷりを発揮させるなよ！　確かにお前は金髪手には指輪ジャラジャラのチャラ男設定だけど実は鍛冶師の仕事を手伝っていて体はしっかり出来ているという設定だろーが！

そんな所で無駄にチャラチャラしてんじゃねえよ！　もはやお前が言うとナンパなんだよ！　お前が出来るのはナンパじゃない！　難破のハズだ！　いい加減自分のキャラ設定を定着させろよ！

『・・・・・・いいの？』

これは・・・・・・あの女の子？　可愛らしい声してるなあもう！

『オッケーオッケー。可愛いから。むしろ大歓迎』

『そういう所チャラ男って思うよ。僕』

『お褒めの言葉、有難う』

褒めてねえよ。

『え～。それでは。勇者のご冥福を願いまして。乾杯！』

だから死んでねえよ。お前を冥土にぶち込むぞ。

『乾杯』

うわ。冷静に乾杯って言ってるし。

『かんぱい・・・・・・？』

ああっ。もう！　少し戸惑っていてくれてる所が可愛いなあもう！

・・・・・・つーか。今のままだとやばくね？　普通に生き埋めにされるんじゃね？　俺。

『そういえば、名前は？』

『・・・・・・セレネー』

セレネーか。可愛い名前だな。

『へー。セレネーか。可愛い名前だなぁ』

ぐあああああああああああああああ！　畜生！　こんなチャラ男と同じ事を思っていたのか俺は！

『セレネーちゃんはどうしてこんな所に？』

ああ。ボレアスは同年代の女の子には大体ちゃん付けだったな。村でも。

『地上の落盤事故に巻き込まれて・・・・・・気がついたら最下層にいた』

『そりゃ大変だったな。他のモンスターも襲ってくるだろうにこんな『鉱龍』に襲われて』

『・・・・・・ゼーゲルコーンはこのダンジョンの主。だからゼーゲルコーンが居る所にはゼーゲルコーンが持つスキル、『威圧』でモンスターが襲ってくる事はないから・・・・・・』

『なるほどね。だから他のモンスターが襲ってこないんだな？　その『威圧』で』

確かに、『威圧』というスキルはある。主に戦闘中に相手モンスターをびびらせてモンスターを逃げるようにするスキルだが。
しかし、このスキルはレベルが高ければ高い程成功しやすく、また、低ければ低い程成功しないので。
俺は今まで使わなかった（いや、使えなかった、が正しいか）が。
『・・・・・・だけど今のこのゼーゲルコーンに『威圧』なんかあるの？　なんか心なしか涙目になってるんだけど』
やっぱりか。
『ああー。そういえばそうだなあ。なんか、『画鋲を思わず踏み潰してしまって痛さを我慢してる』ってトコか？』
それは俺が画鋲って意味か？　喧嘩売ってるのか？　相手になるぞコラ。
つーかこいつ等俺が埋まってる事に気がついていないだろ。
・・・・・・そうだ。向こうの声（かいわ）が聞こえているのだったら、こっちからの声も聞こえるんじゃないか？　気づくのが遅かった。なんてバカなんだ俺は！
「お――――――――――い！　俺はちゃんと生きてるぞ――――――！　早く助けてくれえええええええええ！！」
☆
ずずっ、とお茶を一すすりするボレアス。

「平和だねえ」
「平和だなあ」
二人とも何かを忘れている気がしているのだが。
しかしそれはさておいて。
「さて、そろそろ残りのノルマ分の『エンペラー鉱石』を採掘しておくか」
「そうだね」
と、二人が立ち上がった所で。
『お――――――――い！　俺はちゃんと生きてるぞ――――――！
早く助けてくれえええええええ！！』
そこで。
二人は。
何を忘れているのかを。
思いだしたみたいで。
「「・・・・・・」」
「『たすけて』って言ってるけど・・・・・・？」
セレネーがちょこん、と少し首を傾ける。
「言うな。ヤツの事は忘れるんだ」

『あっ！　テメっ！　何自分の記憶から俺を抹消しようとしてるんだ！　後で覚えてろよ！』

「全く。ヤツとは長い付き合いだったが・・・・・・・　これだけは言える。アイツは・・・・・・・　勇者のヤツは地獄（あっち）に行っても笑って暮らせる、ってな」

『ふざけんな！　お前自分の初登場は何話か思い出してみろ！　五話だろうが！　まだこの話入れても三話目だろうが！　それでよくも『長い付き合い』とか言えるな！　それに何気に『あっち』を『地獄』にして呼んでんじゃねえよ！』

「嗚呼。勇者の魂よ。永遠に」

『お前を地獄に叩き落すぞ！』

「勇者の事は残念だったよ・・・・・・・　勇者が量産された暁には連邦（ゼーゲルコーン）などあっという間だったのに」

『それ物凄く不吉な言い回しじゃねーか！　それ絶対に俺死ぬよね！？　戦闘機に特攻されてその後に白い悪魔に斬られて死ぬよね！？』

ぶっちゃけ言ってしまうと。

二人は別に助けてもいいとは思っている。

本心は。

だけど本心と表面上の心は違う。

違うから本心があって、違うからこそ表面上の心があるのだから。

ゼーゲルコーンの足を退ける、という事は、二人には不可能だと

解っていた。
なぜならそれぐらいの筋力なんて普通の生身の人間が得られる物じゃないし、それにそんな浮遊魔法をボレアスは習得していない（コークスはＭＰが皆無なので論外）。
だから最早諦めるしか無い。
と、いう事を説明するボレアス。
その後、勇者のギャーギャーとした声は聞こえなくなった代わりに、「しくしくしく」というそれはまるですすり泣くような哀れな声が響いてきたという。

☆

・・・・・・。

なんか、さあ。
泣いても、いいよ、ね？

つーか泣いたけど。

しかも無駄に張り切っちゃってさあ。冒頭で。
『よって、『鉱龍ゼーゲルコーン』が動いてくれないと、反撃も出来なければここからどく事も出来ないのであった』
って言ったけど。
反撃どころか鉱龍（コイツ）は今必死に涙目になりながら痛みに耐えててそれどころじゃねえよ！　攻撃の気配なんかほとんどねえよ！
無駄に張り切っちゃった俺が恥ずかしいよ！
つーか今は自分の恥をプレイバックしている時じゃない。

どうやって本当にまずは本当に。

どうやって脱出しよう・・・・・・この『ＴＨＥ・画鋲』状態から。

そして。

その時。

フワッ、と俺の頭上の『鉱龍』の足裏が、浮いた。

「えっ・・・・・・？」

あの役立たず二人組じゃないとすれば。

それはつまり。

「セレネー・・・・・・？」

この浮遊魔法の感覚は、やっぱりセレネーの物だった。

しかし、これだけの質量を浮かせるなんて、それはとてつもなく難しい事なのだ。

「早く。出て」

「お、おう」

俺は『残念な剣』を『鉱龍』の足裏から引っこ抜いた。同時に、ダッシュで足裏着地ポイントから脱出する。

この浮遊魔法は確かに、セレネーからの物だった。

というより。

この魔法、というより。
セレネーのレベルって・・・・・・。

セレネー　レベル：四十七
体力：二百七十五
攻撃力：二百十六
防御力：二百四
すばやさ：二百二十七
ＭＰ：三百四十五

ゼーゲルコーンを倒す平均的なレベルは五十台。
そして確かに、セレネーも逃げなきゃいけないレベルなのは解るけど。

それでもレベルの割りにＭＰがとんでもなく高くて（この分だと魔法力も高そうだ）。

そして俺達なんかよりもレベルがとんでもなく。遥かに。圧倒的に。

高かった。

というか次元が違っていた。

第八話　あれは燃えであり萌えなんだ！

で、出られた・・・・・・。

くそう。まさか人間が踏み潰されてるのにのんきにティータイムにしゃれこまれるとは思わなかったぜ。

しかし、この女の子・・・・・・セレネーも何気にレベルがとてつもなく高いな。

セレネー　レベル：四十七
体力：二百七十五
攻撃力：二百十六
防御力：二百四
すばやさ：二百二十七
ＭＰ：三百四十五

・・・・・・いや。

高すぎる。特にこの序盤のレベルの俺達からみたら。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一

すばやさ：一
ＭＰ：一

ボレアス　レベル：二十
体力：五十
攻撃力：三十五
防御力：三十四
すばやさ：三十三
ＭＰ：三十四

コークス　レベル：二十
体力：五十五
攻撃力：三十八
防御力：三十八
すばやさ：三十八
ＭＰ：皆無

恥ずかしい！　自分達のステータスだけど物凄く恥ずかしい！
しかも俺達全員のレベルを足してもセレネー一人に及ばないなんて！
女の子一人に負ける勇者とその愉快な仲間達ってどうよ！？
これは冗談抜きで凹むわ！

「あ・・・・・・えっと・・・・・・」

「？」

ありがとうだ。ありがとう。「どうもモンスターの足をどけていただいて有難うございました」だ。

言え！　言えるはずだ俺！
そうだとも。確かに転生前（正確に言えば最初の転生前）、ただの平凡な高校生Ａだった頃はコミュ障だったせいで友達もロクに出来ずに一人家で魔王をオーバーキルして高笑いをする虚しい日々を送っていた。
女の子との会話なんて一切無かった。それどころか友達が居なかった（今思うと虚しくて泣けてくる）
だけどこれぐらいは言えるハズだ！　そうだとも！　これはお礼だ！　・・・・・・・決して可愛いから緊張しているワケじゃないんだからねっ！

「あり『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』ぎゃとう・・・・・・って違う！　なんだ『ありぎゃとう』って！」

そうだ。
俺が踏み潰されていた間は。
ゼーゲルコーンが画鋲を踏み潰したかのごとくな痛みに耐えていたから動かなくなったからであって。
そして今はその画鋲（ざんねんなつるぎ）も俺の手にあるのであって。

よって。

『鉱龍』が完全に復活したのであって。

「・・・・・・セレネーさん？」

「セレネーでいい」

「ええっと、セレネー」

「何？」

「コイツを倒す事は出来る？」

「無理」

だろうな。だからこそ逃げてたわけだし。

「ボレアスとコークスは・・・・・・ああ。なんかごめん。聞くまでも無かったな」

「「そんな悲しい目で見るなッッ！！」」

フッ。レベル二十か。ゴミめ。

「と、とにかく！　復活したんなら早く倒してよ！」

ああ。そうか。

俺にはこのゴミ二人と違って能力値が低くても『スキル』があるから余裕だったな。

「くらえ！　ひっさつこんぼうアタック！」

「うわ・・・・・・技名言っちゃってるよ・・・・・・・・恥ずかしくないのかな。ていうか残念すぎるね。技名とか」

何やら聞き捨てならない声が聞こえたような気がしたが、気にしないでおこう。

そして俺はこんぼうを片手に一気にゼーゲルコーンに飛びかかり・

・・・・・・。

「言うなって。本人はノリノリなんだから。技名が残念だけど」

飛びかか・・・・・・。

「ああ。それもそうだね。哀れだけどそっとしておこうか。それにしても残念な技名だ」

飛（ｒｙ・・・・・・。

「聞こえてるから！　完全に聞こえているから！　ていうか残念な技名とかいうな！　俺本人に言われてるならまだ対応しやすいけど俺じゃなくて技名を残念と言われると対応しづらいわ！　それにお前ら必殺技を叫ぶ事はそれほど悪くないんだぞ！」

「「例えば？」」

「某二人で一人の仮面ライダーだってしょっちゅう言ってるだろ！　ジョーカーエクストリームとか！　ダブルエクストリームとか！　ライダーキックとか！　それがどれだけ俺の少年心をくすぐったと思う！　あれは燃えであり萌えなんだ！　男の浪漫なんだよ畜生！」

「ああ。そういえばやってたね。そんな仮面ライダー。アレは結構面白かった」

「でも非現実（フィクション）と現実（ノンフィクション）をごっちゃにするなよ。実際に必殺技名を言うのは痛々しいぞ。結構。そういうヤツに限ってクラスで浮くんだよ」

「うるせえええええええええええええええええええええええ！（泣）」

もういい！　技名はあっても無くても！　心が折れるわ！
しかもクラスで浮いてたとか言うな！　心に刺さるわ！　元々クラスで一人浮いていただけに！

「とりあえず喰らえ！」

そして。
今度こそようやく。
俺はゼーゲルコーンに向かって飛びかかった。
一気にこんぼうを振り上げて、そして。

――――――――振り下ろすッ！！

ゴッキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッッッ！！　と、ゼーゲルコーンの脳天にこんぼうが炸裂した。
そして同時に。

バキッ・・・・・・！　と、こんぼうが折れた。

「折れたあああああああああ！？」

俺の手には。
無残にも砕けてしまったこんぼうの亡骸。
もとい、

「ざ、残念丸！！」

「「名前あったんだ・・・・・・」」

因みに今命名した。

トン、と、地面に軽く着地する。

しかし。

ゼーゲルコーンは、まだ倒せていなかった。

「ッ！？」

「・・・・・・ゼーゲルコーンの第二のスキル。『鉱石の鎧』」

これはセレネーの声だ。

そうだ。忘れていた。

ゼーゲルコーンには『鉱石の鎧』という特殊スキルがあるんだった。

特殊スキル、というのは通常のスキルとは違い、そのモンスターにのみ備えているスキルの事だ。

そしてゼーゲルコーンの特殊スキル、『鉱石の鎧』の能力は、ずばり『一撃封じ』。

簡単に言ってしまえば。

『一撃で倒す』という事を封殺するスキルだ。

・・・・・・やばくね？

そもそも。

俺の戦闘スタイルは、『スキル』を使って相手を一撃で倒す事が主体となっている。

それがつかえないとすれば。
俺は『一撃必殺、現在無職の残念系勇者』から（あれ？　なんかさり気に自虐ネタが入ってなかった？　幻だよね？　幻だよね！？）ただの『現在無職の残念系勇者』になってしまう（やっぱり自虐じゃねーか畜生！）。
しかも相棒の『残念丸』が砕けてしまった今、俺の戦力は半減だ・・・・・。
「いや、待って待って待って！　まだ諦めないで！　何か他にスキルはないの！？」
「・・・・・えー・・・・・・・俺さあ、全種類のスキルを習得しているからさあ。もうどのスキルがあるのか解らなくなっちゃったんだよなー・・・・・・・覚えるのもめんどいし・・・・・・・」
「スゲエ！　腹立たしいけどスゲエ！　確かスキルって全部で百種類以上あったよな！？」
くだらないスキルから戦闘で役立つスキルまで備えている。
ギャオオオッッッ！！
とかなんとかやっているウチにゼーゲルコーンさんのご機嫌も斜めになってきたようだ。まあ、さっき残念丸で思いっきり脳天（こんぼう）を叩いてしまったから仕方が無いが。
「・・・・・・相手を一撃で倒すスキルじゃなくて、体力を減らすスキルは無いの？」

「・・・・・・ある。そういえば」

忘れてた。

と、いうより思い出した。

確か『半殺し』・・・・・・じゃなくて『峰打ち』というスキルだったハズだ。

効果は『相手モンスターの体力を四分の一にする』だったっけ（ただしボスには効かない。そんな事になったらタダのクソゲーだ）。

ただし、これも例によって命中率が十％以下と低い。

まあ、そこはホラ。俺の他の『スキル』でカバーするのだが。

「体力を四分の一にまでなら減らす事は出来るけど」

「それで十分」

・・・・・・なるほど。セレネーのレベルなら、俺が体力を四分の一に減らせば『鉱龍』を一撃で倒す事が出来るのかもしれない。

「ああー。でももう武器がないしな・・・・・・素手は痛そうだから嫌だし」

「その腰の残念な剣は飾りか！」

「飾りだ！」

残念な剣ってもうネタ以外の何物でも無いだろう。

でもまあとりあえず。

今はこの残念な剣で我慢しよう。

そして俺は――――

『鉱龍』に、飛びかかった。

「おっりゃあああああああああああああああああああああああああああああああッ！！」

スキル。

『峰打ち』を発動。

バキッ・・・・・・！　と、何かが砕けた音がした。

しかし、俺の手元の『残念な剣』は折れてはいない。

今度は。

『鉱龍』纏っていた鉱石が砕けた音だった。

俺が地面に着地すると同時に、セレネーが魔法を発動。

纏った鉱石が砕けた『鉱龍』の胴体の真上に現れたのは。

巨大な水の槍。

この魔法は知ってる。

最大レベルの特大魔法。

『水の槍Ｌｖ三』。

魔法にはそれぞれ、Ｌｖ一～Ｌｖ三までの三段階があり、その内

その魔法の最低威力のレベルがＬｖ一・逆に最大威力のレベルがＬ

v三だ（と言っても、レベルが存在しない魔法もあるが）。
魔法レベルが上がると、その魔法の威力が上昇する。魔法が進化すると言ってもいい。
しかし、魔法レベルを上げる事はとても難しいし、ゲーム形式で進めるならそりゃ魔法レベルを上げるだけで済むが、前回の転生の経験から言わせて貰うと、Ｌｖ二ならばともかくＬｖ三に到達するにはある程度の才能を要する。

それをいとも簡単に発動するとは・・・・・・セレネーはやっぱり魔法に関しては凄い才能があると見て間違いないだろう。

ドンッ！！　と、『水の槍』がゼーゲルコーンに炸裂する。

そして、今度こそゼーゲルコーンを倒したようで。

経験値が、俺達（勿論、俺以外だが）に振り分けられる。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

ボレアス　レベル：二十五
体力：五十
攻撃力：五十五
防御力：四十四

すばやさ：四十三
ＭＰ：四十四

コークス　レベル：二十五
体力：六十五
攻撃力：四十八
防御力：四十八
すばやさ：四十八
ＭＰ：皆無

セレネー　レベル：四十八
体力：二百七十九
攻撃力：二百十七
防御力：二百十
すばやさ：二百三十
ＭＰ：三百五十一

俺以外の奴等は当然レベルアップ。

・・・・・・つーかボレアスとコークスが経験値を貰うのは納得いかないぞ・・・・・・。

☆

まあ、そんなこんなで俺達は『エンペラー鉱石』を二十個分回収し。

地上へとようやく脱出する為に地上への階段を上る。

しばし雑談。

「そういえばセレネーはなんであんなに強いんだ？　誰かに魔法とか教えてもらってるの？」

「・・・・・・学校、に。通ってる」

ほう。なるほど。

学校、か。

そこで色々と何か学んだりしたから強いのだろうか。

学生の間にレベルを上げている学生は珍しくないが。

しかし。とは言っても。レベルを上げると言っても。それはそれは些細なぐらいのレベルアップだ。

何しろ学生の範囲でしか行えないのだから。

それなのにこれだけのレベルを上げる事が出来るのは本当に努力を重ねてきているのだろうか。

とは言っても。

戦闘職業を変えただけでそのレベルは一へと戻ってしまうのだが。

例えば学園に通っているのならば『学生』。就職した時点で『学生』という職から変わる事になるのでレベルは初期化されてしまう）、職業を変えても高レベル時に習得したスキルや魔法は引継ぎ出来るので『学生』の間にレベルを上げるのはそう悪い事では無い。むしろメリットもあるだろう。

可愛いだけじゃ無いんだな。

「ああ～。頑張ってるな。セレネーは。俺なんか未だ無職だしよー。レベル一だからって公開処刑されたあげく無理って言われたし」

「・・・・・・経歴を作ればいいと思う」

「？」

「学園かどこかで卒業して、経歴を作れば、レベル関係で不利な分を埋められるかもしれない」

・・・・・・その発想は無かった。

そうか。そういえば俺が元居た世界でも『高学歴』という言葉ぐらいはあったな。

そうだ。そうだよ。

運動が出来なくても勉強で経歴を得た人が居るように。

勉強が出来なくても体力で経歴を得た人が居るように。

学園でなにかしらの経歴を作れば、もしかしたら就職で有利になるのかもしれない。ついでに学園生活の合間に鍛冶屋でバイトして。何かしらの資格も得られれば。

俺の全能力値一を埋められるかもしれない。

「・・・・・・結構、アリ？」

俺は就職への道筋が一つ見えてきたような気がしたので。

『エンペラー鉱石』が二十個詰まった重い袋も軽く感じた。

・・・・・・ていうか、なんで俺が荷物持ちなんだ？

第九話　男なんてただのガムよ

「うわ・・・・・・ちょっと引くわ」

ぶっちゃけ殴りたくなった。

マジで。

まあしかし、晴れてこれで鍛冶屋に雇ってもらえる事になったので、なんとかなった事にはなった。

とは言っても扱い的にはバイトレベル。

安定したとは言えない。

そして、バイト生活一日目。

「いいか。俺の事は『親方』と言え。何かあったら知らせろ」

「親方。勇者が躓いて運んでいた鉱石が全部ばら撒かれました」

「親方。勇者が体力の限界で力つきました（体力一だし）」

「親方。勇者がこけた時に床に顔をぶつけて瀕死状態です（防御力一だし）」

「親方。勇者が（ｒｙ」

俺は結局。

一日目で雑用係へと職業（ジョブ）チェンジした。

最早俺に出来るのは「邪魔」と言われながら隅っこの方で体育座りする事だけだ。

「・・・・・・」

「？　泣いてるの？」

「・・・・・・泣いてない」

なぜだかセレネーのその哀れみのこもった目が、悲しかった。

☆

雑用係生活四日目。

俺はセレネーと共に買い物へと出かけた。

まあ、ただの買出しだ。

雑用が板についてきた俺にとって、これぐらい造作も無い。

この四日間。

セレネーはちょくちょく、鍛冶屋に顔を出してくれた。

こっちとしてはむさくるしい男ばかりの所で雑用スキルを磨いているとこういうひらひらスカートの制服姿の女の子が居るとなんだか華やかな雰囲気になるので嬉しい、が。

学校の方はどうなんだろう。

そんなにもちょくちょくと顔を出してくれるのはありがたいが、学校の方をおろそかにされればそれはそれで本末店頭だ。

「違う。店頭じゃなくて、転倒」

「あ、そうかそうか。そうだったなってうおおおっ！？」

心の中を読まれてる！？

「・・・・・・言葉に出てたけど」

「・・・・・・」

いや。まあ。・・・・・・・お恥ずかしい。

「それはそうと。本当に学校の方は大丈夫なのか？」

「うん。こっちの方が、楽しい」

ちゃんと通ってる事は通ってる、のか？

というより、あのむさくるしい所の一体何処が楽しいのか。

ボレアスの奴なんか日に日に少しずつ筋力がついてきていずれムッキムキのガッチガチになるのかと恐れている自分がいるのだがそれは認めない。絶対にだ。

・・・・・・あれだよな。急に二メートル級になって俺の襟首をつまんで持ち上げたりしないよな？

「楽しいって・・・・・・どのくらい楽しいんだ？　あんな所」

「過ぎ去ったあの頃の夏休みと同じぐらい」

「解りにくい上に切ない！」

あの頃って何時だ！？

「あの頃は若かった」

「お前は今一体何歳だ！」

な、なんて奴だ！　今まで無口だとか、あんまり感情表現豊かじゃねえなと思ってたけど案外ツッコミ所があるじゃねえか！

「ふっ。ふふっ」

・・・・・・笑った？

多分。初めて。

「・・・・・・笑った、よな。今」

「？　うん」

「えっと、因みにさっきの『あの頃の夏』のくだりは？」

「コークス君に教えてもらった」

「変な事教わってるんじゃねえ！」

一体何を教えてるんだ！？　アイツは！？

「『勇者との正しい会話の仕方』より抜粋」

「本当に一体アイツは何やってるんだ！？　忙しいバイトの最中、何無駄な事を教えてるのアイツ！？　黙って働けよあのチャラ男が！」

しかも『勇者との正しい会話の仕方』って何それ！？　マニュアルか何か！？

今までセレネーって感情をあまり表に出さないクールビューティキャラだと思っていたけど違った！

ただ『おとなしい』だけだった！

話してみると案外面白い奴だった！

「・・・・・・ま、まあとりあえず、買い物を済ますか」

「そうだね」

これ以上続ければ俺の身が保たない。
ツッコミすぎて。
某万事屋の新八もかなりツッコんでるよな。あれ。
よくもまああんなハードにこなせるもんだ。これからは敬意を込めて新八さんと呼ばせていただこう。
しかしあれだな。
俺のポジションは某万事屋で言うなればまさしく新八さんポジションではないのであろうか。
と、思ってみた今日この頃。

俺達が（というより俺が）買うように頼まれた物は食材だ。
もっと言えば夕食の。
今日は『にこやかデパート』で半額セールを実施する日だ。
雑用暦四日のこの俺は最早半額セールのベテランだ。
・・・・・・ごめん。見栄はった。ぶっちゃけ初めてです。はい。

そう、半額セールとは最早俺にとっては未知の世界。
通いなれた魔王の城よりもミステリアスだ。
中では日々、凄まじき戦士達が争っているという。
・・・・・・これは誇張しすぎか。

まあともかく、俺にとっては未知の世界であるという事が伝われば、それでいいだろう。
んー。なんというか、半額弁当を賭けて命がけで争うラノベを思い出した。

「ベン・トー？」

「そうそれ。・・・・・・って知ってるのかよ！」

「アニメを見たけど面白かった」

「ああ。面白かったな。あのバカみたいなノリが面白くて・・・・・・じゃなくて」

俺が問いたいのは、なんで俺の心の中が読めるの？　だ。

「なんとなく、予測がついたから」

「どれだけ簡単なんだよ俺の心は！　ちょっと悲しくなったわ！」

とかなんとかで。

にこやかスーパーに到着。

勇者が半額セールを求めてスーパーに入る、なんてこれはこれでシュールな光景だ。しかも隣にはひらひらスカートの女の子装備で。

残念・・・・・・でもなく最高じゃないか。

デートみたいで。

・・・・・・いや。やっぱスーパーという舞台が残念だ。

さっそく店内に入る。すると直後に。

「え～！　それでは今から『魔王のひき肉』、その他諸々の半額セールを開始します！」

・・・・・・え。アイツひき肉になってんの？

つーかこの作品において魔王の扱い酷すぎるだろ。
ゲームではラスボスだよ？　ラスボス。

「がんばって」

「お、おう」

ま、まあ今はそれどころじゃない。
とりあえず今日の食料を確保しなければ俺の今日の夕食は親方の殺人パンチとどんべえになってしまう。
まずは『魔王のひき肉』を取り合うライバルの確認を・・・・・・。

おばちゃんA　レベル：九十四
おばちゃんB　レベル：九十六
おばちゃんC　レベル：九十八
おばちゃんD　レベル：九十一
おばちゃんE　レベル：九十九
：　：　：
おばちゃんZ　レベル：九十七

・・・・・・グロっ。

見て見ると金が無いゆえに半額商品を求めて立ち向かっている若

者達が消し飛ばされている。
つーかもうアンタ達が魔王倒せよ。今はひき肉になってるけど。
薄々思ってたけどこの世界色々とバランス悪すぎだろ。

勇者　職業：無職
VS
おばちゃんA～Z　職業：主婦（せんし）

「A～Zて！　個人でかかってこいや！　なんで集団なんだよ！
しかも主婦と書いてなぜに主婦（せんし）！？」

「家庭の平和を守る戦士だからよ」

と、おばちゃんEが答えた。
俺は今まで家庭の平和を守ってるのは一家の大黒柱である父親の方かと思ってたのだが違うのか。

「一体何と戦っているんだよ！」

「家事という名の魔王と日夜戦ってるの。命がけなの。男なんてただのガムよ」

「ガム！？」

「使えないったらありゃしない。その内、紙にくるんでゴミ箱にポイよ」

「ヒデェ！　つーかそのレベルなら本物の魔王と戦えるよ！　最早クリア後のレベルだよ！」

「は？　本物の魔王？　そんなのと戦ったからってなんなの？　家事でも代りにしてくれるの？」

「え・・・・・・いや・・・・・・」

「してくれないでしょ？　そんなひき肉なんかの相手なんてしてられないわよ。時間の無駄よ無駄」

全国の勇者は涙目だ。

あんた等は一体、魔王（ラスボス）をなんだと思ってるんだ。

「と、とにかく今は半額商品を「邪魔よ！　退きなさい！」ごぶふぁっ！」

今夜はどんべえ確定だ。ついでに殺人パンチも。

第十話　制服、鞄、教科書、そしてレベル

俺が鍛冶屋で無職から雑用へと職（ジョブ）チェンジしてから、約一週間が経過した。

あれから、特に変わった事と言えばおばちゃんと少し仲良くなった事ぐらいだろうか。なにせもうスーパーには毎日顔を出してるからな。その度におばちゃんに跳ね飛ばされてるからな。

そりゃ顔見知りにもなるっつーの。

そもそも、こうしていると当初の俺の目的を忘れそうになる。

お気づきだろうが、第五話の「やってやるよ。クソジジイ」から（我ながら酷いサブタイトルだ）、既にこれで第十話目。

・・・・・・全く就活してないじゃん？

心なしか、タイトルの「しゅうかつ！」も涙目な状況だ。

そもそもジジイが「エンペラー鉱石」がどうのこうのと言い出してから少しこの物語の展開が変わったような気がする。

確かにコメディーっぽく。

そしてパロディネタを織り交ぜつつ。

物語は進行しているように見えるだろう。

しかし。

しかしだ。

実質的には現在はまだバイトの身。

これは「しゅうかつ！」とは言えない。最早「ふりーたー！」だ。

セレネーは現在、その学園とやらに俺達の入学手続きをしてくれてはいるが、このままだと就職活動はおろか学園物としてスタートしてしまいそうだ。

いや、まあ。

それはあくまでも就職活動に必要な物なのだが。

しかし作者はこれからどうやって展開していくのだろうか。

もう取り返しがつかねえぞ？　コレ。もういっそ開き直って「実

は異世界ファンタジーではなくて異世界学園物ですサーセンｗｗｗ」とか言っちゃうか。
いや。止めておこう。
なんか色々とヤバイような気がする。
そして、現在俺は再び買出しの為にスーパーへと赴き、なんとか食材を買う事が出来ていて、帰路についていた。
昼休みの内に早く戻っておかないとまたジジイに拳骨を喰らう羽目になる。
と、いう時なのだが。
俺はそんな帰り道の途中、見知った人物を見かけた。
長くのびた髪を、ツインテールにしている少し小さめな身長の女の子。

「ディオーネ？」

「ん？　勇者さん？」

今更だが、やはり自分の名前が『勇者』のままなのは恥ずかしいな。
ディオーネ。
この一週間の間に知り合った女の子だ。
彼女曰く、セレネーと同じようにディオーネも学生、らしい。
この都市で知る数少ない友人なので、見かけたからには声をかけたかった所だった。

「よう。お前、何してるんだ？」

「えっと、少し調べ物をする為に図書館へと行ってきました」

図書館か。

図書館ね。
そういえばボレアスが通っているな。

「マ田力者さんは？」

「お前なんで今、勇者の『勇』という字を分解した！？　いや、確かに俺はそのまま『勇者』と呼ばれるのは恥ずかしいと思ったけど、察してくれるのは嬉しいけど、そんな呼び方されるぐらいなら普通の方がよっぽどいいわ！」

そもそも何？　マ田力者って！？
逆に読み方に困るわ！
活字なだけに！

「・・・・・・まあ、俺はまた雑用さ。全く。ここの所の俺の生活には何処にも幸せなんか落ちてないぜ。ああ、誰かあ。オラに幸せを分けてくれ！」

「そんな某心優しき超サイヤ人みたいに言っても誰も分けてくれませんよ。そうだ。勇者さん。今日は何の日か知っていますか？

「さあ。誰かの誕生日か？」

「その通りです」

「誰の」

「勇者さんが大好きな平沢唯の声優さんの、豊崎愛生さんの誕生日です」

「お誕生日、おめでとうございまあああああああああああああああああああああす！！」

いかん。

つい叫んでしまった。

それも公道のど真ん中で。

・・・・・・ああそうさ！　俺はけいおん厨さ！　萌え豚で何が悪い！　そもそも転生する前はニート予備軍のような生活をしていたって設定だったし。

「映画けいおん！」、楽しみにしてます。

ディオーネが白い目で見てるが気にしない。

か、勘違いしないでよね！　後悔なんてしてないんだからねっ！

「さて、まあそれはさておき。ここで一つ、良い事を教えてあげましょう」

出た。

ディオーネの雑学披露。

一度知り合ってから何度かディオーネを見かけた事があるが、その度にコイツはこうして何かしらの雑学（コイツの場合は無駄な知識の場合もあるが）を披露してくれるのだ。

まあなんだかんだ言って、もう俺にとっては楽しみですらあるのだが。

というか、さっきの愛生さんの誕生日のくだりも雑学の一つだが。

「ある一人の小説を書く人の事です」

「ほう」

「その人は、人気が全く無いながらも某巨大オンライン小説サイトで楽しく小説を書いていました。そしていつも学園物の連載物ばかり書いていました。そしてある日、ふと、元々は連載用だった小説で、短編を一つ書いてみました」

「それで？」

「なんと、お気に入り登録をしてもらえたそうです！　一件」

「一件だけ！？」

しかしたかが一件、されど一件、だ。

「まあ確かに数字上では一件だけですが、その人にとってはとても嬉しかったらしいです」

「お前は一体何が言いたいんだ」

「つまりですね、人は何もそんな大きな幸せじゃなくても、そんな些細な事でも幸せになれる、って事ですよ。だから勇者さんもそういう何気ない事で幸せになる所から始めて見れば、その内もっと大きな幸せにも巡りあえますよ」

「深い！？」

コイツは確か俺よりも歳は一歳下だったぞ！？
なぜ俺は一歳下の奴に深い事を言われてるんだ！？
アレ？　コイツ、年齢詐称してるんじゃね？
いや、とは言っても一歳差だけども。

「因みにこれは作者の事です」

「短編書いてたの作者(コイツ)！？　連載しかやった事ないクセに！」

「そうみたいですね。しかしメジャー作品の作家さんにしてみれば『フッ。短編のお気に入り登録数一件か。ゴミめ』とか、『お気に入り登録数一件増えただけで喜ぶとか（笑）』っていうレベルでしょうね。しかも書いた短編も無理に学園能力バトルを短編に詰め込んだ所為で伏線張ってもすぐに回収ですから。盛り上がりもクソもありません。最終的に主人公がチートして終わりですし」

「お前結構厳しい事言うな．．．．．．つーか色々と生々しいんだよ。このネタ」

「厳しい？　愛のムチの間違いでしょう」

「愛が強すぎる！」

「それでもまあ、登録してくれた人には感謝ですねー。ただまあ、作者が調子に乗って『続き書くか』みたいなノリになってるのが気にくわないのですが」

「もっと愛のムチでしばいてやれ。特に頭を。つーか連載でやって勝手に爆死してろ」

これ以上、作者(コイツ)の自虐ネタばかりしても意味が無いし、なにより時間の無駄なので、とりあえずは俺はディオーネと別れ、再び帰路についた。

☆

「手続きが済んだよ？」
昼休み終了間近にひょこっと顔を出したのは、セレネーだった。
手続き、とはその学園に入るための手続きだろう。
「おお。サンキューな」
「別に、いい」
これで「異世界ファンタジー物」から「異世界学園物」が始まるのか。
しかしそれでも俺の就職には経歴が必要だ。
今更物語のカテゴリが変更された所で問題は無い。
「で、その学園って？」
「アテーナー学園」
直後に。
コークスが吹いた。
ついでにボレアスも。
そしてコークスがげほげほとむせながら、
「ぼふうぇごふぃふ」
日本語でおk。
そしてかろうじて口が動くボレアスが説明を始めた。

「あ、アテーナー学園ってこの国で一番の名門と言われている所じゃないか！　そそそ、そんな所にどうやったら入学出きるのさ！？」

「頼んだら、良い、って言ってくれた」

「えええええええええええええェｅｅｅｅｅｅｅｅ！？　ウゾダドンドコドーン（嘘だそんなこと）！！」

ボレアスもついに壊れたようだ。

何もオンドゥル語をしゃべるまで壊れなくてもいいのに。

しかし、まさかこの町に元々住んでいたコークスならともかく、ボレアスがそこまで驚くぐらいの学園というのならば、かなりの所には違いない。

「はあ。なんだかとてつもなくめんどくさい所らしいな」

「去年の大企業への就職率は百二十％だったけど」

「さあ、セレネー。入学はいつすればいい？　用意する物は？」

あっはっはっ！　これで俺も人生勝ち組コースだ！

・・・・・・とは言っても、ちゃんとここでのバイトは続けるつもりだ。

あとついでに他の所でもバイトをしてみようと考えてたりする。まずはとりあえず何らかの技術を身につけておくのは損でも無いし、こういう色々なバイトを経験するのも、まあ一つの経験なのだ。

しておいて損は無い。金も入るし。

「入学に必要な物は四つ。制服、鞄、教科書、そしてレベル」

・・・・・・・あれ？

「今なんと？」

「？　入学するのには大体レベルが二十五以上は必要」

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

ボレアス　レベル：二十五
体力：五十
攻撃力：五十五
防御力：四十四
すばやさ：四十三
ＭＰ：四十四

コークス　レベル：二十五
体力：六十五
攻撃力：四十八
防御力：四十八
すばやさ：四十八

ＭＰ：皆無

セレネー　レベル：四十八
体力：二百七十九
攻撃力：二百十七
防御力：二百十
すばやさ：二百三十
ＭＰ：三百五十一

まあ元々。
この就職都市『フロイス』はぶっちゃけスタート地点の村の次の都市なわけだから。
とてもとても序盤で、スタート地点から来たのであれば、レベルもこの辺りならまだ大体十ぐらいが関の山なので、レベル二十五以上が条件、という事はまあ入学はほぼ不可能だ。
しかし、ボレアスとコークスは俺と行動を共にしていた所為でガンガンレベルアップしちゃったワケだが。

いや、それよりも俺だよ！
どうするんだよ！　このままでは俺の人生設計が！　輝かしい未来が残念な未来へと変わってしまう！
「くそう・・・・・・ならばレベル詐称とかするしかないな・・・・・・」
と、俺はブツブツ言いながらなんとかレベル詐称についての案を練り始めるのだった。

最後に。

愛生さん、お誕生日おめでとうございます。

第十一話　セレネー先生のしゅうかつ講座（前書き）

今回はためになる！？　セレネー先生のしゅうかつ講座編。
しゅうかつ中の人、必見！？

第十一話　セレネー先生のしゅうかつ講座

学園とやらに入学が決まった事には決まったのだが、まあ、準備期間、というのも必要だろう。しかし、後で調べて見ると有名な就職校（進学校じゃないぞ）だったので、これで立派な『肩書き』が出来た。

しかし、勿論就職の為の努力は怠らないつもりだ。

インターネット（なぜこんな物があるのかはツッコまないで欲しい。俺にも解らん）で就職活動について一通り学んでみると、まず大切なのは情報だ。

これは大切な事だが見落としていた、ような気がした。

例えば、企業情報。

就職した企業についての情報。

それがあるのと無いのでは違う。

企業がどんな人材が欲しいのか、そしてどのような傾向があるのか、という事を知っておけば、役に立つだろう。

うん。これだ。

元々「どこか就職口、ありませんか？」というだけであんな残念な経歴を持っていけばそりゃ公開処刑されるだろう。

フハハハハハ！！　見てろよ神殿（ハローワーク）のおっさんども！　いずれ、貴様達を驚かせるような結果を出してやろうじゃねえか！！

「と、言うわけでセレネー先生。さっそく教えてください」

まあ、とりあえずは就活、就活、とガツガツいかないで（タイトル否定上等だコノ野朗）、まずはちゃんとした下準備、土台の土台固めが必要だ。

それこそ、就活に必要な情報がいるだろう。

「・・・・・・解った」

バイト終わりの夕暮れ。
とある鍛冶屋の一室で、俺達はセレネー（もとい、セレネー先生）に就活のイロハを叩き込んで貰おうと、こうして集まった。
宣言しておこう。
今回はギャグパートは無しだ！
あんなウケてないギャグパートを延々と無駄にしても仕方が無いしな。
今回はそれこそタイトル通り、「しゅうかつ」してやろうじゃないか。
物語十一話目・・・・・・ついにタイトルが報われる日が来たか！
ここからは就活生必見のコーナーだ！　きっと！

「でもその前に、特別げすとを紹介する」

「特別ゲスト？」

「ゲスト」を「げすと」って呼ぶなんて可愛いなあもう！

「こんにちは勇者さん。何やら楽しい事をしてますね」

ひょいっ、と顔を出したのはディオーネだ。

「・・・・・・」

「なんですかその顔は。せっかく来たのに」

「うわあ・・・・・・」

「今『うわあ』って言いました！？　言いましたよね！？」

だってお前が来たら折角の真面目就活コーナーが台無しになるじゃないか。

「ぷん。いいですよ。勝手に雑学を披露してやろうじゃあありませんか！」

「止めてくれ！　折角の俺の宣言が粉々になる！」

今回は真面目パートにする、って決めたのに！

「俺は『セレネー先生のしゅうかつ講座』を楽しみにしてきたんだぞ！」

「あのアムロの有名なセリフで『アムロ、ガンダム行きま～す！』という物がありますが、それが言われたのは本編の第二十一話『激闘は憎しみ深く』のみです」

「無視すんなや！　つーか割とどうでもいい！」

ディオーネが披露してくれた中で一番どうでもいいネタだった。

ワリとマジで。

そして、ちょんちょん、と俺の隣のテーブルに座っていたボレアスが俺の肩をつついてきた。

「あの、この無駄な雑学をドヤ顔で披露している子は誰なんだい？」

「ああっ！　ついに無駄っていいましたね！？　言ってしまいましたね！？」

その後ぎゃあぎゃあとボレアスと言い争うディオーネを端に、俺はがくっ、と頭を垂れるのだった。そしてその隣では、コークスがぐうすかと寝ており、そして俺の目の前でセレネーがきょとん、とした顔でディオーネとボレアスの言い争いを眺めていた。

☆

「・・・・・・ちっ。じゃあいいですよ。だったらまともな物を披露してやろうじゃないですか」

「そうか。だったらさっさと披露してくれ」

そうすればコイツも収まるだろうから。

「ふっ。それでは仕方が無いですね、疲労してやりにゃしょうじゃにゃいですかにゃ」

嬉しさか、それともあまりにも言い争った所為か、なぜか言語バランスが崩壊していた。

「おほん。それでは・・・・・・。世界で始めてＳＯＳ信号を使用したのはタイタニック号です」

・・・・・・お、おお。

確かにまともだ。というかコイツの場合は最早雑学というよりも豆知識だと思うのは気の所為ではないのだろうか。

そしてディオーネはえへん、と大して大きくもない胸をはってい

る。

「どうですか勇者さん」

「・・・・・・ああ。そうやって雑学を披露している時のお前が一番可愛いよ」

だから早く『セレネー先生のしゅうかつ講座』を始めてくれ。頼むから。

「なっ！？　か、かわっ！？　そそそ、そんな事言ったって、なにも出ませんよ！？」

「？　ああ」

その後、一人であたふたとするディオーネを端に、ようやくセレネー先生のしゅうかつ講座が始まった。

☆

「まず就職活動に大事なのは情報もそうだけど、『自己分析』も大事」

「「「自己分析？」」」

「そう」

こくん、とセレネーはうなずく。

「簡単に言えば、今まで自分がやってきた事や好きな事、得意な事

を見つめなおす、という事。そこから、自分の長所が見えてくるし、自分の長所が見えてくる、という事は面接の時の自己ＰＲがしやすくなるだけじゃなくて、自信を持って言えるようになるし、それが面接官に対して好印象にもなる」

おお。『自分を見つめなおす』という作業から最終的に『面接官に対しての好印象』に繋がっている。

これだよ！　俺が求めてたのは！　無駄な雑学じゃなくて！

「・・・・・・なぜか今、私を侮辱されたような気がするのですが」

「気のせいだ。セレネー。続きを」

エスパーかコイツは。

「でも、自己分析なんて一体どうすればいいんだ？」

いつもは寝てばかりの不真面目な生徒のコークスが気がつけばむくりと起きていて、セレネーに質問をむけいていた。

何時の間に起きたんだ。お前。

「じゃあまずは、自分の良い所を自分で考えて、この紙に書いてみて」

そう言って、セレネーはＡ四サイズの紙と鉛筆を人数分配り始めた。

ふむ。自分の長所か。

こういうのはまずはステータスを書いてみるか。

勇者　レベル：一
体力：一
攻撃力：一
防御力：一
すばやさ：一
ＭＰ：一

・・・・・・これ長所？
いや、違う。断じて違う。
これはダメだろ。

「セレネー。消しゴムは無いか？」

「用意してない。こういうのは、思い切って書かなきゃダメ。だから、初めから消しゴムを用意してると『後で消せる』みたいな気持ちを作らないようにする為にあえて用意しなかった」

それならボールペンを用意すればよかったのでは？　とはあえてツッコむまい。
多分、「消しゴムが無い」という心の余裕を擬似的に消す為の物だろうか。

くっ。他に何か長所は・・・・・・。
そうだ！　装備だ！　装備に何かあるのかもしれない！

装備

勇者　残念な服
　　残念なズボン
　　残念な靴
　　残念な剣
　　残念丸（残念なこんぼう）
　　残念な盾

畜生！
何の役にも立ちゃしねえじゃねえか！
・・・・・・いや待て。
俺にはアレが、スキルがあるじゃないか！
組み合わせる事で完全に無敵チート状態になれる、『スキル』！！
そして俺は、（ステータスを棒線で消した）紙の上に、『スキルっ！』と殴り書きをした。

「・・・・・・ゆーしゃ？」

「何だ？」

「他の事は？」

「・・・・・・」

・・・・・・・。

・・・・・・・。

・・・・・・・。

「・・・・・・・無いな」

自分で言ってて悲しくなる。

そしてそんな俺の側で、ディオーネが『雑学！！』と殴り書きをしているのが見えた。

つーかお前はなんで書いてるんだ。

「どうして？」

「それ以外に浮かび上がらないからだよ」

ダメだ。自分で自分をけなして何の意味がある！？　俺はただのドMか！

「『優しい所』は？　私を、助けてくれた」

「・・・・・・」

お、おおう。

自覚した事は無かったが、そういう事を他人から言われると、例えお世辞でも嬉しくなる。

そしてさらさらとセレネーが『優しい所』と俺の紙に書き加えた。

・・・・・・やば。嬉しい。

セレネーは再び先生モードへと戻る。

「こういう時に書けなくても、それは仕方が無い」

まあ実際、俺だけじゃなくてボレアスもコークスも停止したままだ。

「だから今日から日記をつけてみるのも、いいかも。そこに今日の出来事や、ちょっとした事を思いつくだけ書いてみれば、後で見た時に自分に関する事が思い出せる」

と、いう事で、第一回、セレネー先生のしゅうかつ講座はとりあえず幕を閉じた。

まずは、『しゅうかつ日記』の作成から始めよう、と思った。

・・・・・・おお。

真面目に出来たぞ。今回は。

第十一話　セレネー先生のしゅうかつ講座（後書き）

時々こうやって真面目（？）パートをしたいと思います。
というより、ようやく、「しゅうかつ！」らしくなってきたので物語的にはセーフ？

第十二話　くっ・・・・・・！　魔界より受け継がれし暗黒魔術さえ使えれば・

俺はとりあえず、外に出てみる事にした。
元々、転生前はニート予備軍のような生活を送っていたので、この世界でも中に引きこもるような生活が主流だったような気がする。
運動もかねて、とりあえず外に散歩しに行った、というワケだ。
仕事？　勿論サボって来たけど何か？

まあ、とりあえずしゅうかつ日記をつける為だ、となんとか自分に言い聞かせる。
こうやって日々の行動のどこかに自分の長所を見つけよう、と思った。
俺が今歩いているのは、就職都市「フロイス」の隅に当たる地域だ。
都市部に比べてやはり活気が溢れているかといえばそうでは無いが、ここは自然の多い所で、散歩にはもってこいの所だった。
たまに仕事をサボってはよく来る所だった。
と、そこで、見慣れたツインテールを見つけた。
前回の話、「第十一話　セレネー先生のしゅうかつ講座」で色々とひっかきまわしてくれたディオーネだ。

「よう。ディオーネ」

「あ、勇者さん。こんにちは。お仕事は・・・・・・ああ、サボってきたんですよね。勿論」

「・・・・・・そこはせめて『お仕事は？』ぐらいにしてくれよ。なんでサボってきたって決め付けてるんだよ」

まあ実際にサボっているのだが。

「はあ。全く。主人公がそんなんじゃあ、まさにタイトル破綻ですね。タイトルが『しゅうかつ！』なのに主人公が仕事（バイト）をサボるとか・・・・・・就活する気が無いじゃないですか」

「仕方が無いだろ。俺なんて雑用しかやらされてもらえないんだから」

「それは貴方のレベルが低いからでしょう？」

それを言われると元も子もない。

くそう。こういう時に俺をこんなレベルとステータスにした神（クソジジイ）を恨んでしまう。

「それにしても勇者さん。私の悩みを聞いてもらえますか」

「まあ、聞ける範囲でなら」

「私のこの髪型って、ツインテール、っていう設定じゃないですか」

設定って言うなよ。

「そうだな。俺にはそう見える」

「そもそも、どうして私がツインテールになっているか、知ってますか？」

「？　いや」

「それはですね、作者脳内に『後輩＝ツインテール』という方式が立っているだからなんですよ！　というか作者は後輩というジャンルに限って、『後輩ツインテール萌え』なんですよ！　某迷い猫ラノベでも『心にゃん萌え』になってますからね。作者」

「生々しい事言うなや！　そもそも作者ネタは止めろとあれほど・・・・・っていうかお前、その髪型嫌いなのか？」

「いえ。後輩ツインテールはなかなか需要がありますからね（※あくまでも、作者の個人的な意見です）。これで私も人気が出れば儲けもんですよ」

「読者は儲けもんとかいう後輩ツインテールは要らないと思うが」

「甘いですね勇者さん。某ゆるやか部活ライフの後輩ツインテールがどれだけの人気を博している事やら。」

「あれとお前を比べるのは大層失礼な話だな」

「しかし問題はですね。挿絵の無いこの活字だけの状況で、私がいかに可愛い後輩ツインテールかをアピールする方法を模索しているんですよ」

「言っておくが、活字だけで見たら今のお前の印象最悪だぞ」

「ええっ！？　な、なぜですか！？　ちゃんと『雑学キャラ』としての地位を確立しているのにっ！」

「お前の場合は雑学というよりも無駄知識だろ」

それも計算だったのかよ。ますます印象が最悪になっていくぞお前。

しかしまあ、確かに見かけは可愛い後輩ツインテールだ。しかもコイツが語り始める時にツインテールがぴょこんっ、とはねるのがまた可愛い。

「そ、そんな事よりも勇者さん」

「お前今自分の悩みを『そんな事』って言ったな。思いっきり」

「くっ・・・・・・！　畜生が嗚呼(アア)嗚呼(アア)嗚呼(アア)嗚呼(アア)嗚呼(アア)嗚呼(アア)嗚呼(アア)！！」

「それ何語！？」

「ぜえっ、はあっ、ぜえっ・・・・・・そ、そんな事よりも勇者さん」

おお・・・・・・なかなかタフだな。

「最近、この物語について何か疑問を感じる所はありませんか？」

「お前、生々しい所突くなあ・・・・・・」

小説に限った事では無いが、こうやって作中で『作者』とか『作中』とか使うのは個人的に生々しいと思ってる。

「ていうか、疑問？」

「はい。一体、この物語は何がしたいのか、という事です。最新話がＵＰされたかと思えば内容はキャラの雑談でほとんどが埋まって

いる上、しゅうかつ自体もなかなか進まない始末。それにモンスターとも最近戦ってないじゃないですか」

「た、戦ってますうー！　最近なんかスゲーんだぜ。鉱龍と戦っちゃったんだぜ？　あれはお前が初登場する前だったからなー」

「でもそれってセレネーさんが結局倒したんですよね？」

・・・・・・なんで知っているんだよ。さては事前に読んでやがったな！？

「お、俺だってスキルで体力を結構減らしましたあー」

「・・・・・・でもレベルが上がらないんですよね」

哀れみをもった目で、ディオーネが見つめてきた。
やめてくれ。
泣きたくなる。

「勇者さんのやっている事は、レベルがマックスになったポケモンで野生のポケモンを狩って、後は学習装置で他の手持ちポケモンのレベルを上げている事と同義ですよ」

「うるせえ！　割と当たってる事を言うんじゃねえよ！」

それにしても上手い例えだな。
レベルマックスという点では違うが。

「はあ。こうしてまた、無駄に雑談で文字数が埋まっていってますね」

「やめろ。それ以上言うな。作者はなあ、この作品においてはこういう雑談を売りにしてるんだよ。最近はもう『タイトルなんかクソくらえ！』みたいな状況に陥っているらしい」

「あーあ。無駄に『就職活動』みたいな設定を作るからこうなるんですよ。ここは『なろう』で流行りの異世界転生主人公最強ハーレム物でも書いとけばよかったのに」

「だから生々しい事言うなや！　色々と失礼だろ！　そういうジャンルを書いている作者さんに！　・・・・・・ていうか、あの、俺も一応二回ほど転生しているんですけど」

「二回？　そうやって無駄に転生するから物語序盤でネタに詰まるんですよ。それにしても、さっきから私達の雑談ばかりで中々物語が進みませんね。もう読者さんにはこうやって毎回ダラダラと雑談ばかりします、って言っておきますか？」

俺にはお前のそういうもう何も怖くないと言わんばかりのフリーダムな所が凄いと思う。

因みにフリーダムとはあの某スーパーコーディネーターが乗り回して七色ビームを撃ちまくるガンダムの事は指していない。

しかし、このままダラダラと雑談を続けても読者が離れていくのは確かだ。

これは作者の執筆のモチベーションを下げかねない事態だ。

「そうだな。よし、そういう事なら俺が物語りを進めてやろう」

「ホントですか？　大丈夫ですか？　勇者さん。こんな強引に物語を進めてしまって」

「当たり前だ。モンスターが潜む外に飛び出していって、トランザム状態で無双やろうじゃないか！」

因みにトランザムとはガンダムＯＯ（ダブルオー）に登場するガンダムが使う、パワーアップモードの事である。二期
では敵も見方もトランザムを使いまくり、「トランザム祭りｗｗｗ」とネタにされ、ダブルオーの欠点とされてきたが、まあそれは置いておこう。ていうか色々とごめんなさい。

「勢い余ってト裸ンザムしないでくださいね」

「やめろ！　劇場版のあのシーンの事は言ってやるなや！」

色々と映画館が気まずい空気になったのは言うまでも無い。

こうして、一部の人達にしか伝わらないであろう会話をした後、俺は「フロイス」の外へと出向いた。
因みに、なぜかディオーネもついてきた。

☆

「フロイス」はまだ物語序盤の都市なので（というよりも俺達が進めずにダラダラとしているだけだが）、外に居るモンスターのレベルもまだまだ低い。

「さて、どうやってここから進めようか」

「とりあえず、適当にモンスターに向かってツッコミをいれていけばいいんじゃないですか？　勇者さんのこの物語上のポジション、

って、ぶっちゃけると某万事屋でいう新八ポジションですから」

「あっ！　お前今、新八さんの事を呼び捨てにしやがったな！？
俺の心の師匠だぞ！！　俺はぶっちゃけ銀さんよりも新八さんになりたいと思っているのに！」

「そ、そうですか・・・・・・」

あれ？　ディオーネが若干引いてる・・・・・・あれ？

「まあ、どの道勇者さんは銀さんにはなれませんね」

「・・・・・・」

それはそれで悲しい。「テメエは主人公にはなれネーよ！　ギャハハハ！」と言われた気分だ。

「あー。どこかに誰かのピンチでも転がってませんかねー。こう、『くっ・・・・・・！　油断した』、とか、『俺もここまでか・・・・・・』とか、『俺のこの封印された右腕が使えれば・・・・・・』みたいな中二病全開のどっかの誰かのピンチ」

「そんな『金でも落ちてないかなー』みたいなノリで誰かのピンチを探してるんじゃねーよ。しかもそんな中二病全開のセリフをはく奴が居たらこの目で見てみた・・・・・・」

「くっ・・・・・・！　油断した」

「「・・・・・・」」

聞こえてきた。
それも近くで。
その声のした方を見てみると、何やら一匹の巨大なモンスターが居た（心なしかゾウに似ている）
そして、その目の前に、負傷していると思われる一人の少年。

「俺もここまでか・・・・・・」

言っちゃってるよ。普通に。

「うわあ・・・・・正直引きますねー。実際に言う人が居ると」

「言ってやるなよ・・・・・・」

ていうか、実際見てみると痛々しいな。
その少年は短髪、そして見た所装備らしい装備、という防具を身に纏っていない。
あるのはただの衣服だけだ。
そして右手に剣。

「いやまて。しかし、まだ最後の一線を越えてはいない。あの『俺のこの封印された右腕が使えれば・・・・・・』を言ってないからまだまだセーフだろうが」

「俺のこの封印された右腕が使えれば・・・・・・」

「「アウトおおおおおおおおおおお！！」」

確定だ！
アイツ、完全な中二病だ！

痛々しい！

と、そうやって痛々しい視線をあの少年に向けている場合ではなかった。

直後、モンスターが轟音を上げて、その巨大な右足を少年の真上から振り下ろそうとしたからだ。

「くっ・・・・・・！　魔界より受け継がれし暗黒魔術さえ使えれば・・・・・・！」

まだ言うのかよ！

と、ツッコんでもいられない。これは本当にピンチだ。

あの中二病全開のセリフを聞いて痛々しい視線を向けている場合では無い。

俺はすぐさま、スキル、『先制』でモンスターの行動よりも、自分の行動を先制し、そして、スキル『一撃必殺』を発動。

残念丸（※こんぼう）をモンスターに叩きつける。

あくまでも、人助けの為だ。

「オラアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！　日ごろ雑用でこき使われているストレスを、お前で解消してやらあああああああああああああ！！」

勇者　職業：無職

VS

ファントエーレ　職業：モンスター

べ、別に日ごろからストレスが溜まってたワケじゃあないんだからねっ！？

それにしても、適当な名前のモンスターだな。

絶対使い捨てモンスター（使い捨てキャラとも言う）だろ。コイツ。

「あっひゃっひゃ――――！　死ね死ね死ねえええええええええ！！」

うわあ。今の俺、活字だけで見たらアリー・アル・サーシェスさん（またの名を、野原ひろし）も真っ青の悪役だよ。

「あれ？　クロードさんじゃないですか」

「お前は・・・・・・ディオーネ？」

俺がモンスターを血祭りに上げている間に、邪気眼中二病少年とディオーネが、何やら知り合いだった、という事が解るであろう会話をしていた。

しゅうかつ日記

○月×日　天候：やや晴れ

・モンスターを血祭りに上げる事はストレス解消法として有効。

・中二病って言ってる本人は楽しいかもしれないけれど聞いてるこっちは対応に困る。

第十三話　いや。ただの無職だ

クロード。
それが、俺とディオーネが出くわした、邪気眼中二病少年の名前だった。
とりあえず、俺は近場の喫茶店へと三人で入り（仕事（バイト）をサボっているので鍛冶屋は使えない）、話を聞いてみる事にした。

「フッ。貴様も古の滅びし王族の生き残りか」

「いや。ただの無職だ」

「俺の前で嘘をつくのは止めておいた方がいい。俺には遥かなる次元より得た特殊なチカラがある。貴様の嘘等、視れば解る」

「おい。なんかコイツめんどくさいんだけど」

「我慢してください。こういう人なんです」

「しかも『力』をワザワザ『チカラ』って言ってる事自体がもう完全に病気じゃねーか」

「病気、か。懐かしいな。昔、俺がただの『ヒト』だった頃はなった事がある。それが今じゃ、あらゆる病や病気、怪我ですら一瞬で治ってしまう・・・・・・」

「いやいやいや。お前の病名は『中二病』だから。治す事は不可能だから」

「中二病っていうな！！」

バンッ！　と喫茶店のテーブルを叩くクロード。
周囲の客がビクッ、としてこちらの様子を伺っている。

「バ、バカ！　騒ぐな！　落ち着け！」

「ハッ。い、いかん。俺とした事が・・・・・・これしきの事で『聖力』を消費するとは・・・・・・」

めんどくさいヤツだ。
ていうかこの世界はなまじ魔法とかがある分、中二病のセリフが実現してしまいかねないのだが、どうやらこのクロードにはそんな事は全く無いようだ。
そしてその友達であるらしいディオーネはというと、俺の隣で「我関せず」とでも言いたそうに黙々と本を読んでいる。

「おいテメエ。何勝手に本を読んでるんだよ」

「いやあ。勇者さんがクロードさんに対して思いのほか対処してくれてたんで暇になったので少し読書を」

「何の小説なんだ？　それ」

「『禁書目録』ですよ。。人気らしいですからねー。とりあえず読んでおこうと思って」

「小説？　違うな。ライトノベルは小説ではない。ライトノベルだ。寝言は寝て言え」

・・・・・・。

「まあ、俺がそういう小説を読んでいると、よく俺は普通のヒトとは違う、って思ってしまうんだよな。それも仕方が無い事だろうが。凡人にラノベの素晴らしさを理解出来るハズも無い。表紙のイラストを見ただけで軽蔑するような連中と俺は違う。だが、俺はちゃんと中身を見てから評価する人間だ。他人から視れば俺は異端だろうが、俺は俺だ。それ以外の何者でもない」

うわー。

もうこのセリフの中に「俺は他の人とは違うアピール」＋「（無駄）知識アピール」＋「中二病発言」を練りこませてくるとは・・・・・・さすがだ。

というか、コイツの発言はとりあえずスルーしておいた方がいいような気がする。

「まあそれは置いといて。お前はどうしてあんな所に、あんなモンスターと戦っていたんだ？」

「俺の存在理由を見いだす為だ」

「質問に答えろや」

駄目だ。

俺がスルーしても片っ端から中二病をぶっこんできやがる。

それにしても、俺の経験では、中二病患者は現実とゲーム等の世界をごちゃごちゃにしてしまっている傾向があるが（そもそもここが俺からすれば異世界なのだが）、このクロードの方はどうなのだろうか。

そんな俺をよそに、今度はディオーネは新聞を読み始めていた。

どうやらさっきの小説、もとい、ライトノベルは読み終えたようで（元から最後の方まで読み進めていたようだ）、黙々と新聞を読んでいる。

「今度は新聞か？」

「はい。私からすれば宝庫ですから。何しろ『雑学キャラ』という設定ですし」

「だから設定って言うな」

新聞のＴＯＰを飾っているのはどうやら最近の勇者の年間討伐魔王数の減少が問題視されている、という事らしい。

前から薄々思っていた事だが、相変わらずこの作品の魔王に対する扱いが酷いような気がする。

「ああ。その記事か」

「知っているのか？」

クロードが予想外にも、新聞に対して興味を持った。

てっきり「俺には必要無い。頭（ココ）に地球（ほし）の全てが詰まっているからな」とかなんとか言いそうだと思ったのだが。

「当たり前だ。近年、『勇者』という職業は一種の不景気に突入している。それというのも、ココ最近、、教会の蘇生料金の値上がりが起こっているからだ。熟練のパーティならともかく、初めて魔王に挑むパーティは、どうしても一度は魔王に挑んで全滅してしまう場合が多い。しかし、そこで魔王が提出した全滅したパーティを教会が蘇生されるワケだが、蘇生もタダでは無い。前まで、蘇生料金

は一人五百円だったのが、昨年から政策の方針で蘇生料金が一人千円となってしまった。一人分の値段が二倍にもなるとなかなか魔王と戦いづらいだろう。そもそも、魔王に挑む前は装備を整えている為に金欠になっている事が多いからな。まあ、この問題も要するに教会が蘇生料金を値上げしなくてもいいように上手く予算をやりくりしてだな・・・・・・」

「解った！　解ったからもう何も言うな！」

クロードは現実をしっかりと見ている中二病患者でした。
というよりも、まずはこの世界観について一応突っ込んでおこう。
勇者って職業なのかよ！
魔王がワザワザ自分が全滅させたパーティを教会に提出してるの！？　意外と律儀だな！　魔王って！
教会も蘇生料金が高すぎるんだよ！　四人で全滅したら通常料金で二千円じゃねーか！もう少しまけろや！
つーかこの世界の通貨って「G（ゴールド）」じゃなくて「円」なのか夜おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！

・・・・・・ふう。
ツッコミ終わり。

「それでだ。お前はどうしてあんな所で、あんな高レベルモンスターと戦ってたんだ？」

「己と見つめあい、己の強さを測るた（ｒｙ」

「中二発言は無しだ」

「中二病って言うな！」

なんとなく、コイツのブレーキのかけ方が解った気がする。

「勇者さんの言うとおりですよ。クロードさん。『ファントエーレ』は本来、あの『鉱龍』と同じレベルのモンスターです。どうして戦ってたのですか？　クロードさんのレベルはまだファントエーレと戦えるぐらいには高く無いでしょう？　というか、本来はあんな所に居るのもありえないハズなのですが」

「・・・・・・」

クロードは相変わらず、口を開こうとしない。

何か、俺達に言えないような事情があるのだろうか。

何か、とてつもなく重い、俺達には知りえないような過去を背負っているのだろうか。

「・・・・・・その、この前、一レベルだけレベルアップして調子にのってファントエーレ討伐クエストを受けてしまいました・・・・・・」

「お前はバカなのか！？　バカなんだろ！！」

因みに説明しておくと、『ギルド』にはダンジョン系統のクエスト以外にも、「討伐クエスト」という物が存在する。

そういった種類のクエストはその名の通り、モンスターを討伐するクエストだ。

要するにこのバカは、レベルが上がったから、と言って調子に乗り、「うっかりと」、ファントエーレ討伐クエストを受けてしまったらしい。

ワザワザギルドがファントエーレをこんな所まで呼び出して（俺

が倒したが）。

「す、すまん・・・・・・」

しゅん、と、クロードが肩を落とす。

ううっ。

こうも素直になられると、こちらとしてもやりづらい。

「・・・・・・はあ。まあもういいけどさ。お前、まだ体もそんなに出来ていないみたいだし、あんまり無茶しない方がいいぞ？」

「体が出来ていない？」

「そうそう。なんか言っちゃ悪いけど、華奢だしな。それこそ女の子みたいな」

「・・・・・・お、俺は女じゃない！」

「それこそ『視れば』解るわ！」

いや、まあ。

確かに顔立ちは整っていて綺麗だし、少しメイクすれば女の子としても十分通用するような顔なのだが、まあ格好とか、「俺口調」とかがなんか色々と男っぽい。

まあ、今日解った事と言えば、クロードが中二病キャラでありながら現実をしっかりと『視ている』事だろうか。

何にしても、めんどくさいキャラが一人、増えたという事だろうが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1221x/

しゅうかつ！～初期装備で魔王（ラスボス）を倒してしまったレベル１の就活

2011年11月15日21時47分発行